高田遺跡

たかだいせき

茶園改植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

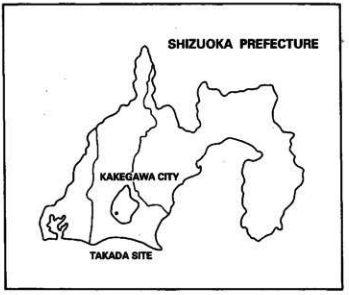
2005

掛川市教育委員会

高田遺跡

たかだいせき

茶園改植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2005

掛川市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成15年７月16日から12月９日まで実施した、静岡県掛川市吉岡字真黒坂1220,1221に所在する高田遺跡の発掘調査報告書である。整理作業は、平成16年５月17日から８月25日まで実施した。

2　調査は、個人が行う茶園改植に伴う本発掘調査で、国及び県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。調査面積は900㎡である。

3　発掘調査に際し、地権者の村松兼太郎、鈴木ゆり子両氏及び耕作者の鈴木克典氏には遺跡に対する保護・保存について、御理解と御協力をいただいた。

4　発掘調査は掛川市教育委員会主任木村弘之が担当した。

5　発掘調査ならびに整理作業では下記の方々の参加を得た。

伊藤　實　藤田　弘　長谷川勇次郎　中村房男　平川延雄　寺沢　巧　山崎富士男
松浦せい子　伊藤和子　鈴木静江　竹田徳子　鈴木　操　笠谷みゆき　加藤君代　萩田咲子
榛葉豊子　高橋直美　山下広美　増本七重　杉山和子

6　本書の執筆・編集は木村弘之が行った。

7　発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育文化課が所管して、実施した。

8　調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　挿図における方位は、真北を示す。

2　遺物番号は、挿図と写真図版とで共通する。

3　使用測地系は、世界測地系（測地成果2000）である。

4　本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。

ＳＢ：竪穴住居跡　ＳＨ：掘立柱建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＸ：不明遺構

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　これまでの調査歴 …… 1
Ⅲ　調査の方法と調査区の設定 …… 2
Ⅳ　調査の経過 …… 3
Ⅴ　地理的・歴史的環境 …… 3
Ⅵ　発掘調査の成果 …… 10
Ⅶ　ま　と　め …… 44

挿図目次

第 1 図　全体区割図
第 2 図　周辺遺跡分布図
第 3 図　調査地点位置図
第 4 図　遺構全体図
第 5 図　ＳＢ－１実測図
第 6 図　ＳＢ－２実測図
第 7 図　ＳＢ－３実測図
第 8 図　ＳＢ－４実測図
第 9 図　ＳＢ－５・ＳＢ－６実測図
第 10 図　ＳＢ－７・ＳＢ－８実測図
第 11 図　ＳＢ－９実測図
第 12 図　ＳＢ－10実測図
第 13 図　ＳＢ－11実測図
第 14 図　ＳＢ－12実測図
第 15 図　ＳＨ－１実測図
第 16 図　ＳＢ－７土器検出状況図
第 17 図　ＳＨ－２実測図
第 18 図　ＳＸ－１実測図
第 19 図　ＳＫ－１実測図
第 20 図　１号墳実測図
第 21 図　２号墳実測図
第 22 図　３号墳実測図
第 23 図　４号墳実測図
第 24 図　５号墳実測図
第 25 図　出土遺物実測図(1)
第 26 図　出土遺物実測図(2)
第 27 図　出土遺物実測図(3)
第 28 図　出土遺物実測図(4)
第 29 図　出土遺物実測図(5)
第 30 図　出土遺物実測図(6)
第 31 図　出土遺物実測図(7)
第 32 図　出土遺物実測図(8)
第 33 図　出土遺物実測図(9)
第 34 図　出土遺物実測図(10)
第 35 図　出土遺物実測図(11)
第 36 図　高田遺跡遺構分布図

挿 表 目 次

第 1 表　周辺遺跡一覧
第 2 表　土器観察表

写真図版目次

図版 1
調査地遠景（西から原野谷川を臨む）
調査地垂直写真（合成写真）

図版 2
調査前状況（南東から）
調査地北区西側完掘状況（南から）
ＳＢ－１（南から）

図版 3
ＳＢ－１近接
ＳＢ－２（南から）
ＳＢ－３近接（北西から）

図版 4
ＳＢ－５・６（東から）
ＳＢ－７・８（北から）
ＳＢ－９（東から）

図版 5
ＳＢ－10（東から）
ＳＢ－11（北東から）
ＳＢ－12（北から）

図版 6
ＳＢ－２炉跡
ＳＢ－３炉跡
ＳＢ－４炉跡

図版 7
ＳＢ－５炉跡
ＳＢ－６炉跡
ＳＢ－９炉跡

図版 8
ＳＢ－12炉跡
ＳＨ－１（南から）
ＳＸ－１土器検出状況

図版 9
ＳＢ－７土器検出状況（北から）
ＳＫ－１半裁（南から）
ＳＫ－１完掘（北から）

図版10
１号墳周溝断面南側（南から）
１号墳周溝断面西側（南から）
１・２号墳周溝断面（南から）

図版11
１・３号墳遠景（南西から）
１・３号墳及び住居跡群遠景(南西から)
１号墳から４号墳を近接

図版12
１号墳全景（南から）
１号墳周溝完掘（東から）
２号墳遠景（南から）

図版13
１～24

図版14
25～39

図版15
40～59

図版16
61～84

図版17
85～108

図版18
109～132

図版19
133～156

図版20
157～177

図版21
178～201

図版22
202～221

Ⅰ　調査に至る経緯

高田遺跡が所在する和田岡原（各和原・高田原・吉岡原）には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が多数集中して存在する。中でも、直径30mの円墳・春林院古墳、全長40～60mを越える前方後円墳・吉岡大塚古墳、瓢塚古墳、各和金塚古墳、行人塚古墳と数多くの中小円墳が台地縁辺部に占地しており、これらは和田岡古墳群として知られている。

これら遺跡の多くは、現在、茶畑として利用されているが、茶園改植（茶の品種改良に伴い、畑地の水はけを良くするために土壌を改良する、いわゆる“天地返し”を行うことが多い）により、遺跡の一部が消滅する事態が生じている。掛川市教育委員会では、茶園改植に伴い消滅する状況となった遺跡に対し、その記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

今回調査の対象となった地点でも同じ事態が生じた。平成14年11月、耕作者である鈴木克典氏から来年に茶園改植を行いたい旨の連絡を受け、当該地を確認したところ、市指定史跡「東登口古墳群」に隣接し、また、昭和62年度に発掘調査を実施した個所に近接した地点であることがわかった。このような経過のもと、当該地に遺跡が存在することは明らかであったことから、平成15年度に補助事業申請の手続きをとって本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は、平成15年７月16日～同年12月９日まで実施した。本発掘調査終了後、鈴木克典氏から茶園改植について文化財保護法に基づく届出が提出された。

○文化財保護法第57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届（茶園改植）平成15年12月18日付

○土木工事等のための発掘調査に係る指示について　（慎重工事）教文第3118号 平成16年１月５日

翌、平成16年５月17日～同年８月25日までの間、報告書刊行作業を行った。

Ⅱ　これまでの調査歴

高田遺跡の発掘調査は昭和62年度を皮切りに、現在までに６次を数える。高田遺跡に接して女高Ⅰ遺跡が所在する。同遺跡は弥生時代中期に出現した遺跡で、高田遺跡より一段階早い時期の集落跡である。

昭和62年度に第１次調査が行われた。調査は、茶園改植に先立って行われた。調査面積は約780㎡で、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡２棟、土坑２基、小穴多数が検出された。この調査では、弥生時代後期の焼失家屋から出土した壷から多量の炭化米が出土している。また、古墳時代前期の土器を包含する一辺約13m、幅約４m、深さ約60cmの溝が検出されている。古墳の周溝と推定している。

平成元年度には、第２次調査が実施された。発掘調査は、市道拡幅工事に先立って行われた。調査面積は約2,400㎡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡４棟、小穴多数が検出された。この他、古墳の周溝も検出されている。

同年度には第３次調査も実施された。調査は、茶園改植に伴って行われた。調査面積は約250㎡で、弥生時代後期の竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡２棟のほか、古墳時代後期以降の土壙墓６基、小穴３基等が検出された。

翌２年度には市道拡幅工事に先立つ発掘調査として、第４次調査が行われた。調査面積は約1,200㎡で、竪穴住居跡は検出されなかった。弥生時代後期から古墳時代前期と推定される溝が検出されている。本調査で高田遺跡の北西範囲を知ることができた。

平成５年度には茶園改植に伴う発掘調査として第５次調査が行われた。調査面積は約1,400㎡で、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡43軒、掘立柱建物跡６棟が検出された。竪穴住居は５m四方の隅丸方形を呈しており、ほぼ中央に炉をもつ。密に検出されており、複数の建て替えがされて

いることが確認された。

参考までに、高田遺跡に隣接する女高Ⅰ遺跡は、高田遺跡よりも土器型式で一段階早い時期、弥生時代中期に営みを開始した集落跡で、これまでに地点を変え6次の調査が行われている。調査総面積は約3,654㎡で、検出された遺構数は、高田遺跡第5次調査のみの遺構数とほぼ同数である。こうしたことから、高田遺跡がいかに遺構が密集して築かれているかがわかる。

Ⅲ　調査の方法と調査区の設定

1　発掘調査

調査は、調査区を2分割し、まず、北半部を重機により表土（黒ボク土）除去を行い、開始した。黄褐色土面で精査を行い、遺構確認、そして検出した遺構を人力によって掘り下げ、遺構の作図、写真撮影を終えて完了した。南半部でも同じ作業を行い、調査全体の作業を完了した。

測量用の基本杭の設置は、業者に委託し、経緯座標軸（第Ⅷ座標系）を基に真北に合わせて各調査区域を10m間隔で設置した。また、ベンチマークの高さの基準は、海抜（東京湾の平均潮位）とした。なお、測地系は世界測地系を使用した。

遺構等の実測にあたっては、1m方眼に水糸を張り、遺構実測は1／20縮尺で、遺物出土状況図は1／10縮尺で記録した。これらの遺構、遺物には標高を記録した。土層図も1／20縮尺で記録した。

写真撮影は、ブローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズカラーネガ、同カラーリバーサル、同モノクロを用いて撮影した。このほか業者に委託して、ラジコンヘリコプターで調査区全景、遺跡遠景などの撮影を行った。なお、空中写真撮影の際には、遺跡全体の清掃等を行い、写真を効果的に見せるため遺構の輪郭を消石灰で縁取りした。

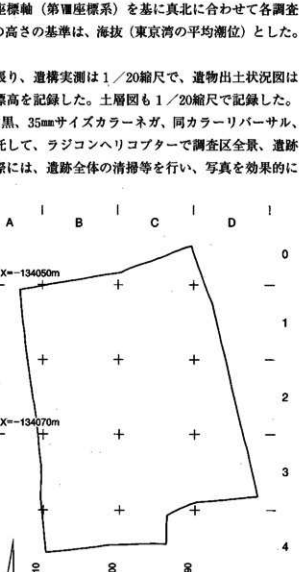
2　整理・報告作業

出土した土器は洗浄し、自然乾燥させた後、注記・接合を行った。ここである程度復元可能なもの、復元が必要なものを抽出し、石膏で復元を行った。

遺物実測作業及び図面整理・浄書作業は、平成16年度に行った。報告書の実測図版に使用するため、現地で実測した遺構図（1／20縮尺）などを基本に調査区全体図及び各遺構図、遺物出土状況図などの編集図版下を作成した。さらに、編集図版下浄書（トレース）し、印刷ができるよう整飾した。遺物実測図も浄書（トレース）し、印刷ができるよう同じく整飾した。

写真類は撮影順にアルバムに整理し、遺構名などを記した。これらの中から報告書の写真図版に掲載するための写真を抽出した。写真を所定の大きさに引き伸ばして、版組と割り付けを行い、また、遺物写真は撮影後、版組、割り付けをした。

報告書執筆作業は、発掘調査で得られた成果を原稿の形にまとめる作業で、整理された実測



第1図　全体区割図

図版や写真図版及び原図等を基に、その遺構ごとに詳細を説明した。フロッピー入力された原稿により印刷した。

3　調査区の設定

X＝－134050.000m、Y＝－50310.000mを起点とし、一区画を10m四方で区切り、その区画ごとにX軸を1，2・・の算用数字、Y軸をA，B・・のアルファベット順で表記した。地区の呼称は左上角を基準とし、1A、2B・・のように表した（第1図参照）。

現地ではこの区画の基準杭をもとにさらに1m方眼を設定し、水糸を張り実測を行っている。

Ⅳ　調査の経過

調査経過は、以下のとおりである。

7月16日～18日 重機による掘削。22日 精査及び撹乱の除去。

8月5日 遺構の新旧関係確認。～19日 1号墳及び2号墳周溝掘削。20日 遺物の取り上げ。

25日 1号墳～3号墳周溝断面図作成。26日～29日 ベルト除去。

9月1日～4日 平面図作成・レベリング。5日～10月6日 住居跡掘削、断面図、平面図作成。

10月8日 空中写真撮影実施。10月9日～17日 住居跡平面図作成。10月20日～23日 反転表土掘削。

24日 表面精査。27日～11月13日 遺構掘削（周溝・住居跡）。

11月15日 現地説明会（見学者70名）。17日～21日 平面図作成・レベリング。27日 空中写真撮影実施。

12月8・9日 埋め戻し。

Ⅴ　地理的・歴史的環境

地　理

掛川市は、静岡県西部地方（大井川以西）にあり、東経138度線上に位置する。南に小笠山、東に牧之原台地に続く丘陵、北には赤石山脈から連なる丘陵に取り囲まれ、その間を原野谷川、逆川をはじめとする中小河川が流路を形成している。これらの河川が形成した沖積平野の端には、開析した小さな谷が無数に入り込んでいる。

高田遺跡は、掛川市の最高点である八高山を源とする原野谷川が形成した和田岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する。段丘は、原野谷川西岸を中心に発達し、北に位置する原泉、原田、原谷地区では小規模な面積であるが、和田岡地区に至る東西約1.2km、南北約2.2kmに広がり広大な面積を持つ。また、東岸には独立丘陵の岡津原が形成され、南の各和地区から袋井市不入斗地区にかけても小規模ながら段丘が形成されている。

この段丘は第四紀洪積世に形成され、砂岩、頁岩の他に一部シルト層を挟んで成り立っているとされる。黒色土（いわゆる“黒ボク土”）、又は暗褐色土の下には、粘性のある緻密な黄褐色土が堆積している。遺構は、この黄褐色土を掘り込んで築かれている。

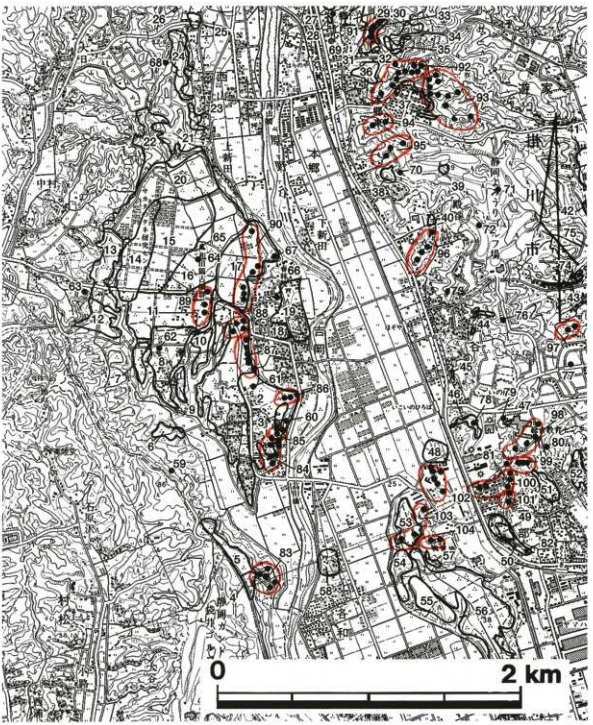
段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ぶ上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ぶ下位段丘面に区分される。当該遺跡は、下位段丘面の高田原に築かれている。段丘は第2図のように、南端が先細る舌状を呈し、緩やかに傾斜している。

歴　史

和田岡地区全域に、遺跡が所在すると言っても過言ではない。これは、第2図の周辺遺跡分布図を見ても明らかである。

この地に見られる最も古い人々の痕跡は、高田上ノ段（庵ノ下）遺跡で採集された尖頭器である。これは、堂山遺跡（原里）で採集された有舌尖頭器と同時期とされ、現在市内最古の尖頭器である。

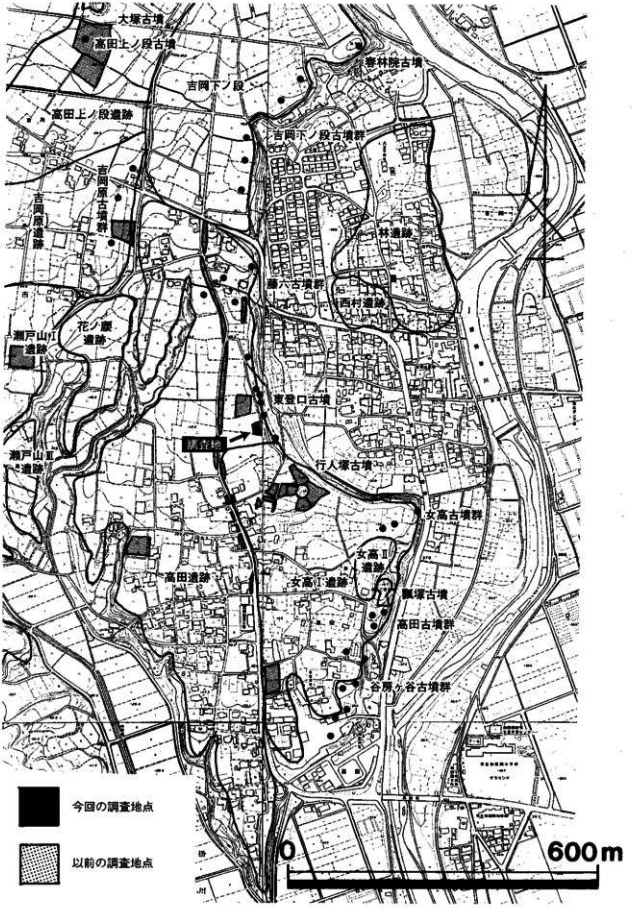
縄文時代になると、遺跡は少しずつ広がりを見せ、瀬戸山Ⅰ・Ⅱ、向山、高田遺跡で押型文土器などが出土している。中期になると、遺跡の数は増大し、最盛期を迎える。中原遺跡では竪穴住居跡が発見されている。その後、後・晩期になると和田岡地区では、遺跡の数が減少していく。



第２図　周辺遺跡分布図

番号	遺　跡　名	時　期	種　類	番号	遺　跡　名	時　期	種　類
1	高　田　遺　跡	縄文(中)、弥生(後)～古墳(中)	集　落	53	岡津原Ⅰ遺跡	縄文(中)、弥生(中・後)	散 布 地
2	女 高 Ⅰ 遺 跡	弥生(中)～古墳(前)	集　落	54	岡津原Ⅱ遺跡	縄文(中)	散 布 地
3	女 高 Ⅱ 遺 跡	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)、奈良、平安	散 布 地	55	岡津原Ⅳ遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地
4	各和金鋳原遺跡	弥生(後)	散 布 地	56	岡津原Ⅲ遺跡	縄文(中)、弥生(中)～古墳(前)	散 布 地
5	高田金鋳原遺跡	弥生(後)	散 布 地	57	椀 貸 横 穴 群	不明	横　穴
6	平 田 ヶ 谷 遺 跡	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	58	各 和 氏 館 跡	中近世	城　館
7	瀬戸山Ⅱ遺跡	縄文(早・中・晩)～古墳(前)	集　落	59	高 田 古 墳	古墳(中)	円　墳
8	瀬戸山Ⅰ遺跡	縄文(早・中)、弥生(後)～古墳(前)	集　落	60	甕 塚 古 墳	古墳(中)	前方後円墳
9	瀬戸山Ⅲ遺跡	弥生(後)～古墳(前)	集　落	61	行 人 塚 古 墳	古墳(中)	前方後円墳
10	花 ノ 熊 遺 跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	62	瀬 戸 山 古 墳	不明	円　墳
11	吉 岡 原 遺 跡	縄文(中・後)、弥生(後)～古墳(前)	集落・円墳	63	今 坂 古 墳	古墳(後)	円　墳
12	大 向 遺 跡	縄文(中)	散 布 地	64	高田上ノ段古墳	古墳(後)	円　墳
13	今 坂 遺 跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	65	大 塚 古 墳	古墳(中)	前方後円墳
14	溝 ノ 口 遺 跡	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)	集　落	66	宮脇行人塚古墳	不明	円　墳
15	中 原 遺 跡	縄文(中)	集　落	67	春 林 院 古 墳	古墳(中)	円　墳
16	高田上ノ段遺跡	弥生(後)～古墳(中)	集　落	68	後藤ヶ谷古墳	不明	円　墳
17	吉岡下ノ段遺跡	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(後)、平安	散 布 地	69	長福寺門前古墳	不明	円　墳
18	西 村 遺 跡	古墳(中)～奈良	散 布 地	70	中 殿 谷 古 墳	不明	円　墳
19	林　遺　跡	弥生(後)～古墳、(前)、平安、中近世	集　落	71	冷 池 古 墳	古墳(中)	円　墳
20	東 原 遺 跡	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	72	穴 ノ 台 古 墳	古墳(中)	円　墳
21	城 ノ 腰 遺 跡	弥生(後)～古墳(中)	散 布 地	73	谷 ノ 口 古 墳	古墳(中)	円　墳
22	西　山　城	中近世	城　館	74	月 様 古 墳	古墳(後)	円　墳
23	中 山 遺 跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	75	宇 制 古 墳	古墳(後)	円　墳
24	後藤ヶ谷遺跡	弥生(後)～古墳(中)	散 布 地	76	堂 前 古 墳	古墳(中)	円　墳
25	久 保 遺 跡	古墳(後)	散 布 地	77	狐 谷 古 墳	不明	円　墳
26	久保山横穴群	不明	横　穴	78	山 崎 古 墳	古墳(中)	円　墳
27	長福寺西遺跡	縄文(後)～弥生(後)、奈良、平安	集　落	79	土 橋 古 墳	古墳(中)	円　墳
28	長福寺脇下横穴群	不明	横　穴	80	赤 渕 古 墳	古墳(中)	円　墳
29	本　郷　城	中近世	城　館	81	土 橋 古 墳	古墳(中)	円　墳
30	古 城 遺 跡	弥生(後)、奈良	散 布 地	82	八王子神社古墳	不明	円　墳
31	宮 坂 遺 跡	不明	不　明	83	各和金塚古墳群	古墳(中)	前方後円墳・円墳
32	宮 坂 横 穴 群	古墳(後)	横　穴	84	谷房ヶ谷古墳群	古墳(中)	円　墳
33	北 ノ 谷 横 穴 群	古墳(後)	横　穴	85	高 田 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
34	原　砦	中近世	城　館	86	女 高 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
35	古 戦 横 穴 群	古墳(後)	横　穴	87	東登口古墳群	不明	円　墳
36	堂 下 遺 跡	古墳(後)～奈良	散 布 地	88	藤 六 古 墳 群	不明	円　墳
37	楠ヶ谷横穴群	古墳(後)	横　穴	89	吉岡原古墳群	古墳(後)	円　墳
38	中 氏 館 跡	中近世	城　館	90	吉岡下ノ段古墳群	古墳(中)	円　墳
39	高　藤　城	中近世	城　館	91	宮 坂 古 墳 群	古墳(後)	円　墳
40	殿 ノ 台 遺 跡	弥生(後)	散 布 地	92	堂 山 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
41	味噌ヶ谷北遺跡	平安、中近世	散 布 地	93	相ヶ谷古墳群	古墳(中)	円　墳
42	味噌ヶ谷横穴群	不明	横　穴	94	稲 荷 山 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
43	十五ヶ谷横穴群	古墳(後)	横　穴	95	五 輪 平 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
44	堂 前 横 穴 群	古墳(後)	横　穴	96	若一王子神社古墳	不明	円　墳
45	舊佐ヶ谷横穴群	古墳(後)	横　穴	97	蟹 沢 古 墳 群	古墳(後)	円　墳
46	山 崎 遺 跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	98	長 沢 古 墳 群	不明	円　墳
47	土 橋 横 穴 群	古墳(後)	横　穴	99	富 部 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
48	高 代 山　砦	中近世	城　館	100	権田ヶ谷古墳群	古墳(中)	円　墳
49	二 反 田 遺 跡	弥生(中)	散 布 地	101	枕 田 古 墳 群	古墳(中)	円　墳
50	富 部 城 跡	中近世	城　館	102	高代山古墳群	古墳(中)	前方後円墳・円墳
51	富 部 遺 跡	不明	散 布 地	103	旗 差 古 墳 群	古墳(後)	円　墳
52	森 平 遺 跡	弥生(後)～古墳(前)	散 布 地	104	椀 貸 古 墳 群	不明	円　墳

第１表　周辺遺跡一覧


大塚古墳
高田上ノ段古墳
吉岡下ノ段
巻林横古墳
高田上ノ段遺跡
吉岡下ノ段古墳群
吉岡原古墳群
吉岡原遺跡
林遺跡
藤八古墳群
西村遺跡
花ノ園遺跡
瀬戸山II遺跡
東登口古墳
調査地
瀬戸山III遺跡
行人塚古墳
女高古墳群
女高II遺跡
高田遺跡
女高I遺跡
瓢塚古墳
高田古墳群
谷房ヶ谷古墳群
今回の調査地点
以前の調査地点
0
600m

第３図　調査地点位置図

弥生時代前期の動向は不明であるが、遺跡として姿を現すのは弥生時代中期になってからである。高田・吉岡原では遺構は伴っていないが、岡津原の岡津原遺跡や各和の山下遺跡では、200mにも及ぶ墓域が形成されている。現在のところ、これらの墓域を形成した人々が営んだ集落は、段丘上では確認されていないが、周辺の低地に営んでいたと推定している。

弥生時代後期になると、遺跡が爆発的に増加する。高田・吉岡原の段丘縁辺部には、至る個所で重なり合った竪穴住居跡が確認されている。集落は、古墳時代前期に継続されるものが多いが、その数は減少する。一方、近年の調査では、段丘の南において古墳時代前期に集落の最盛期を迎える遺跡も発見されてきた。東遠江で見た場合、弥生時代後期後半から沖積地に立地する遺跡が減少し、同時に、台地上もしくは高所に多くの集落が営まれる傾向がある。この和田岡地区においてもその傾向がみられる。これは、東遠江一帯に社会的緊張関係が続いたことから、段丘上に集落が営まれたものと理解されている。

古墳時代中期5世紀になると、各和金塚古墳、瓢塚古墳、行人塚古墳、吉岡大塚古墳、春林院古墳といった和田岡古墳群（平成8年国指定史跡）が築造される。また、和田岡原では、これら首長墓のほかに、刀子などが供えられた長方形の掘り方をもつ土壙墓（どこうぼ）、方墳、円墳などが検出されている。前期まで営まれた集落は、中期になると姿を消している。現在、女高遺跡の竪穴住居跡1軒がこの時期のものとして確認されているに過ぎない。和田岡古墳群を造営した集団は、社会的緊張が解け、低地へと集落の場を移していったのであろうか？　今後、沖積地において、発掘調査されることによって明らかとなるであろう。

《参考文献》

松本一男　1983　「行人塚遺跡発掘調査概報」　掛川市教育委員会
松本一男　1986　「高田上ノ段遺跡発掘調査報告書」　掛川市教育委員会
松本一男　1988　「高田遺跡発掘調査概報」　掛川市教育委員会
前田庄一　1989　「女高遺跡発掘調査報告書」　掛川市教育委員会
松本一男　1990　「藤六3号墳・高田遺跡発掘調査報告書」　掛川市教育委員会
松本一男　1990　「女高遺跡・行人塚古墳発掘調査報告書」　掛川市教育委員会
松本一男　1991　「吉岡原遺跡発掘調査報告書」　掛川市教育委員会
井村広巳　1994　「高田遺跡発掘調査概報」　掛川市教育委員会
村松弘規　1996　「女高Ⅰ遺跡発掘調査概報」　掛川市教育委員会
井村広巳　2000　「溝ノ口遺跡」　掛川市教育委員会

0
1
2
3
4
A
B
C
D
Y=-50290
Y=-50310
X=-134050m
X=-134070m
SH-1
SH-2
SB-1
SB-2
SB-3
SB-4
SB-5
SB-6
SB-7
SB-8
SB-9
SB-10
SB-11
SB-12
SX-1
SK-1
47.4
47.2
47.0
46.8
サブトレンチ
攪乱
焼土
炉
0
8m

第4図　遺構全体図

Ⅵ　発掘調査の成果

今回の調査では、弥生時代後期に属する竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡２棟、不明遺構１基、土器廃棄土坑１基、小穴多数、そして、古墳時代前期の土器を包含する周溝を伴う古墳を５基検出した。この内、１基は規模が大きく２辺の一部が検出されたのみで、推定の域を出ない。これまでの調査で、弥生時代後期から古墳時代前期に至る集落の広がりについて、ある程度把握できていたが、古墳については、その規模と分布について予測できていない状況にあった。今回の調査では、調査面積が少ない割には、密集して古墳が検出された成果は大きい。

以下に、その成果について遺構と遺物に分け、順次、報告をする。

１　遺　　構（第４～24図・図版１～12）

(1)竪穴住居跡（第４～15図・写真図版２～８）

１号住居跡（ＳＢ－１）（第５図・図版２・３）

調査区０Ｃ・１Ｃ（Ｘ＝－134050、Ｙ＝－50300）で検出された。平面の形状は１号墳周溝により削られているが、かろうじて楕円形と推定される。規模は現況で南北６ｍ以上と推定されるが、全体規模は不明である。小穴が８基検出されたが、このうち、住居跡内の南端部で検出された柱穴については掘立柱建物１（ＳＨ－１）に関わる柱穴と推定される。また、同内東寄りに検出された柱穴はＳＢ－１に関わるものと推定される。住居跡の中央部と思われる位置から地床炉が検出されている。

２号住居跡（ＳＢ－２）（第６図・図版３）

調査区２Ｃ（Ｘ＝－134065、Ｙ＝－50300）で検出された。平面の形状は、楕円形を呈し、南北3.8ｍ、東西3.4mとやや小型である。中央よりやや東寄りに地床炉が検出されている。小穴が10基住居内から検出されている。深さはいずれも床面から15～20㎝程度である。このうち、柱穴に該当するものが４基検出された。３号住居より新しいものと推定される。

３号住居跡（ＳＢ－３）（第７図・図版３）

調査区１Ｂ～２Ｂ（Ｘ＝－134060、Ｙ＝－50300）にかけて検出された。平面の形状は、隅丸方形をなすと推定される。南北4.5m、東西5.5mである。中央よりやや東寄りに地床炉が検出されている。小穴が14基住居内から検出されているが、このうち、柱穴に該当するものは不明である。

４号住居跡（ＳＢ－４）（第８図）

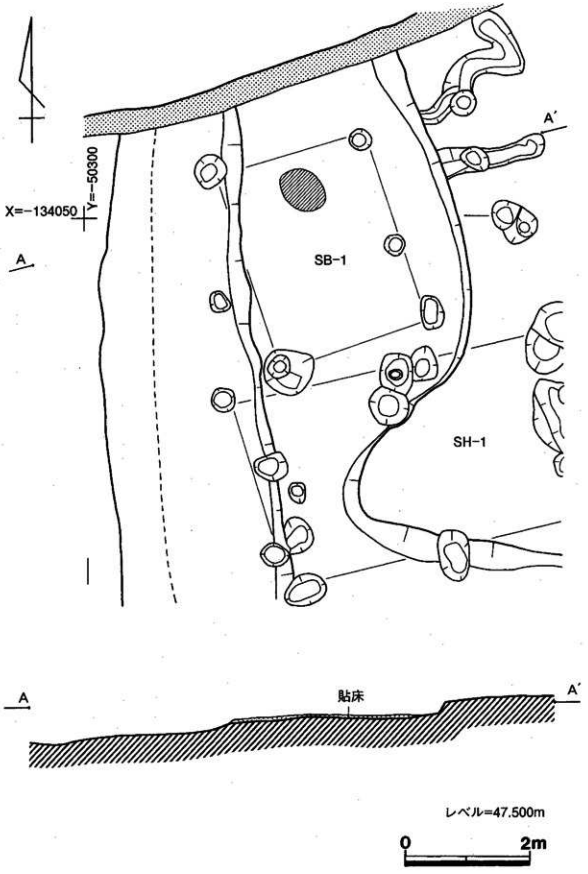
調査区２Ｂ（Ｘ＝－134068、Ｙ＝－50298）に検出された。平面の形状は、隅丸方形を呈し、南北5.5m以上、東西不明である。中央よりやや北寄りに地床炉が検出されている。ＳＢ－３との関係は不明である。小穴が15基住居内から検出されているが、このうち、柱穴に該当するものは不明である。

５号住居跡（ＳＢ－５）（第９図・図版４）

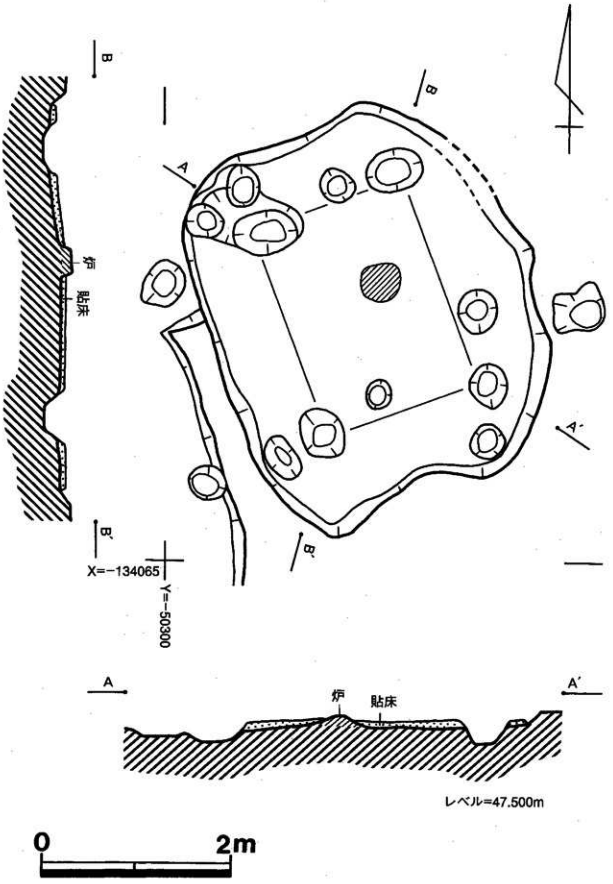
調査区２Ｂ（Ｘ＝－134068、Ｙ＝－50303）で検出された。平面の形状は、楕円形を呈し、南北3.3ｍ以上、東西2.1m以上である。中央よりやや北寄りに地床炉が検出されている。小穴が５基住居内から検出されているが、このうち、柱穴に該当するものは不明である。切り合い関係からＳＢ－６より古いものと推定される。

６号住居跡（ＳＢ－６）（第９図・図版４）

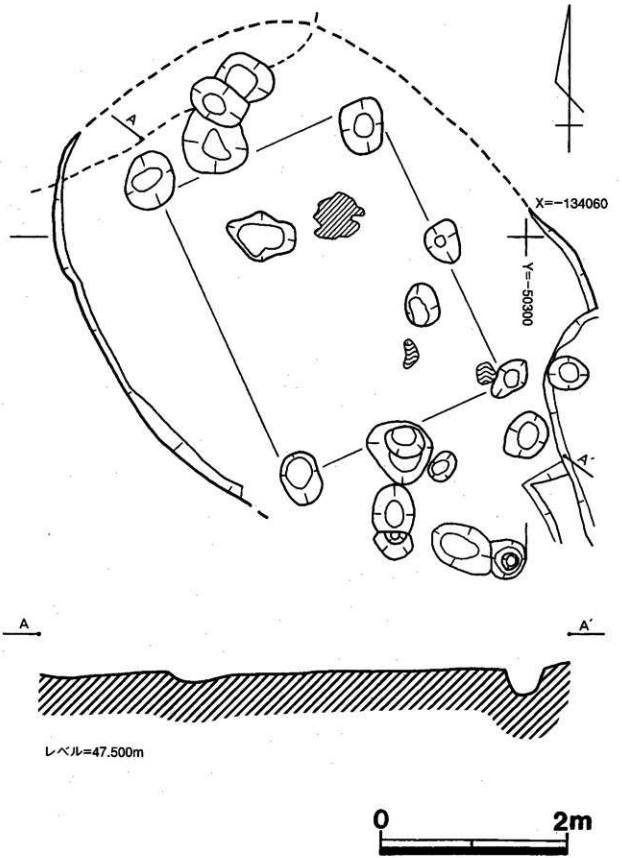
調査区２Ｂ（Ｘ＝－134068、Ｙ＝－50303）で検出された。平面の形状は、不明であるが、南北3.5ｍ以上、東西2.3m以上を測る住居跡である。北寄りに地床炉が検出されている。小穴が５基住居内から検出されているが、このうち、柱穴に該当するものは不明である。



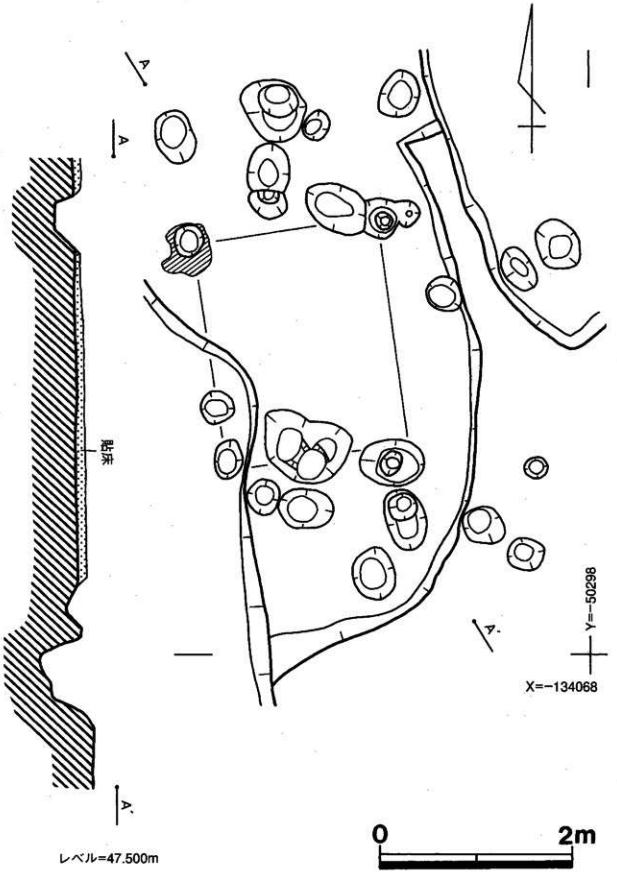
第5図　SB−1　実測図



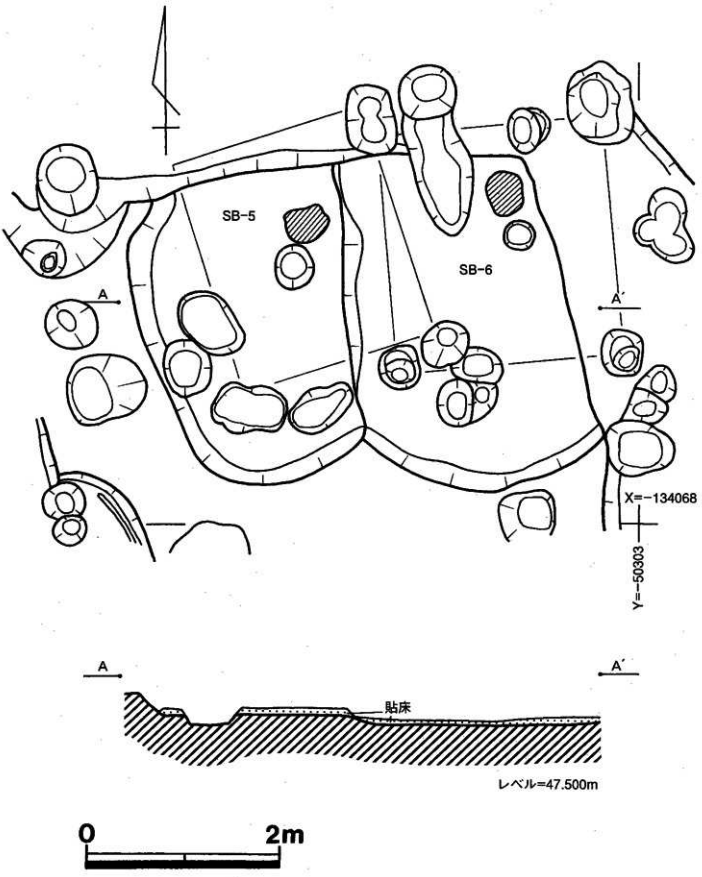
第6図　SB−2　実測図



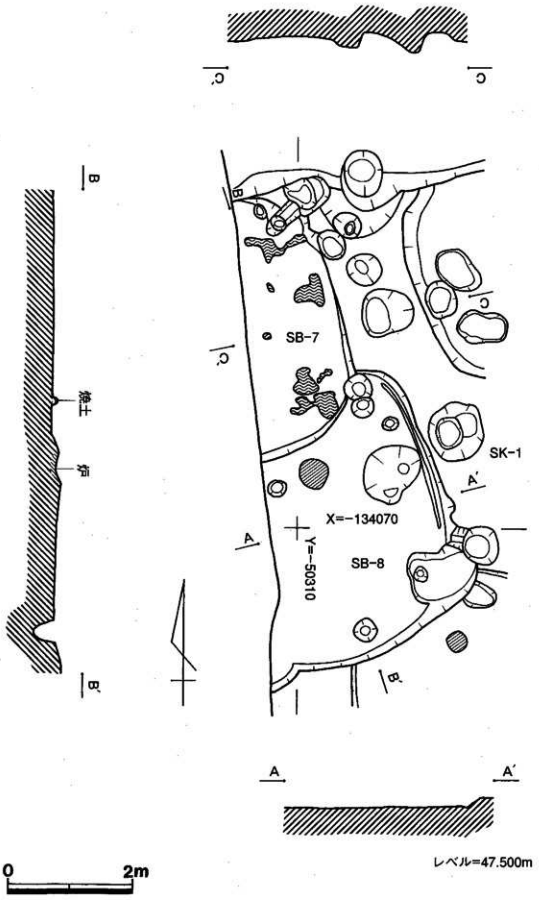
第7図　SB−3 実測図



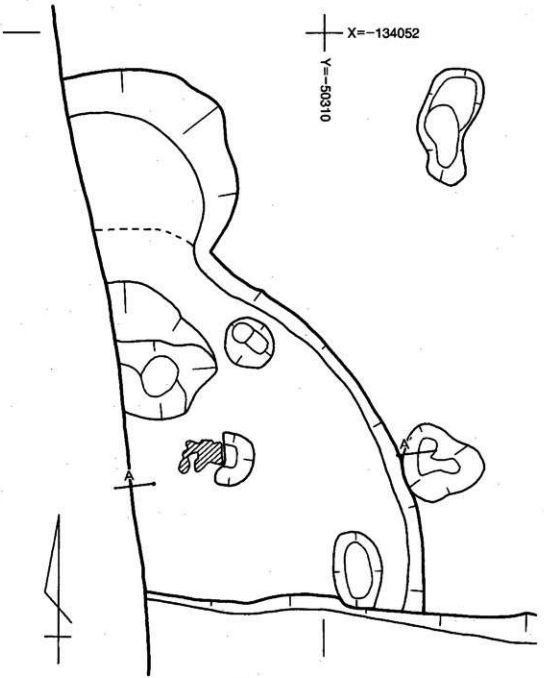
第8図　SB−4　実測図

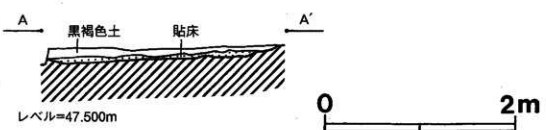


第9図　SB−5・SB−6 実測図

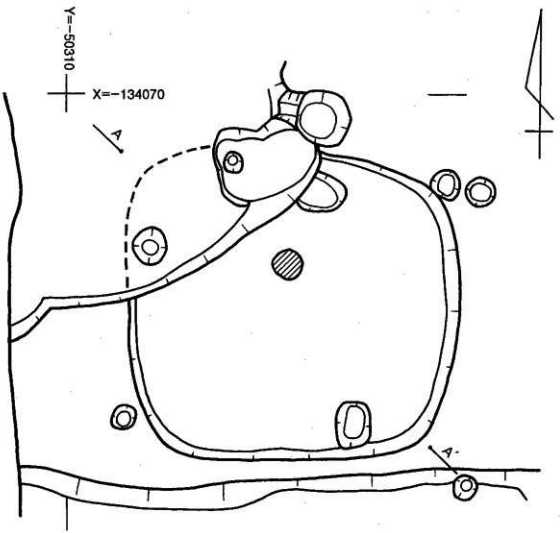


第10図　SB－7・SB－8 実測図





第11図　SB－9 実測図

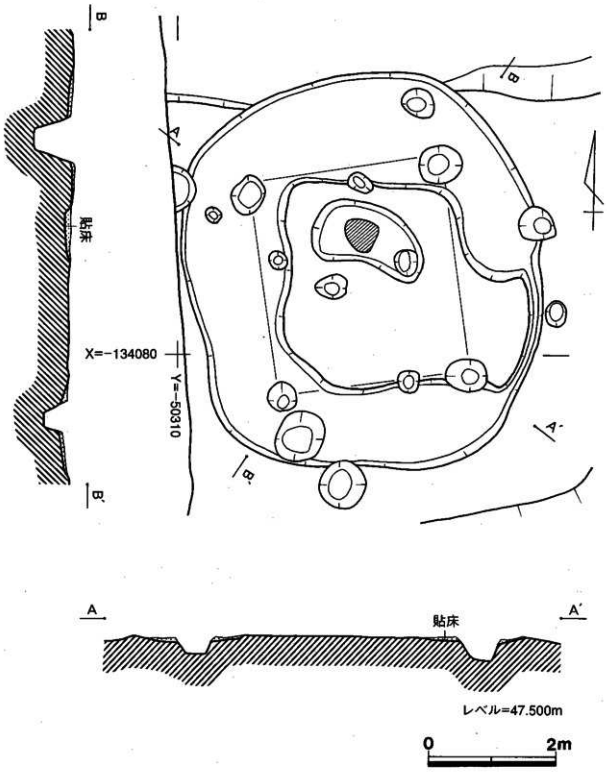


1 暗褐色土
2 黒褐色土（黄褐色土含む）
3 褐色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土（6より暗い）
6 暗褐色土
7 暗黄褐色土
8 暗黄褐色土（7より暗い）

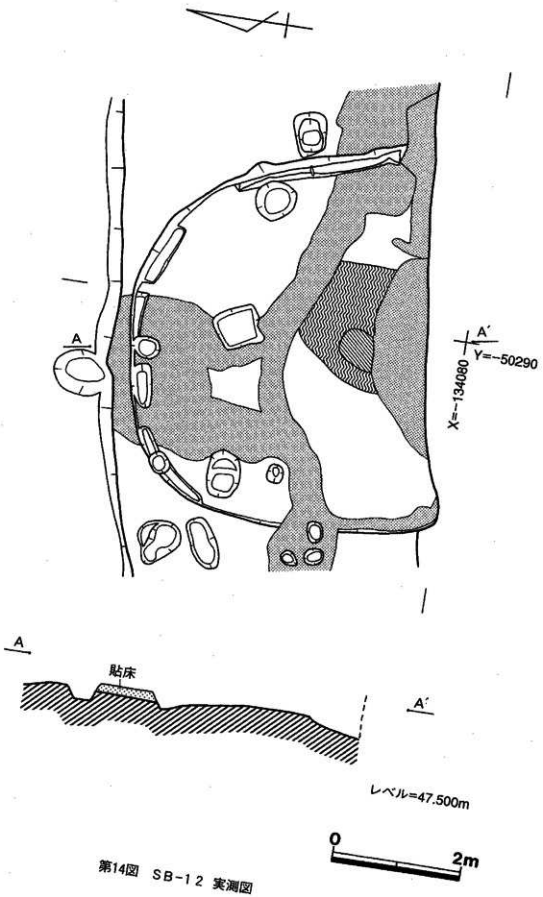
レベル=47.500m

0 2m

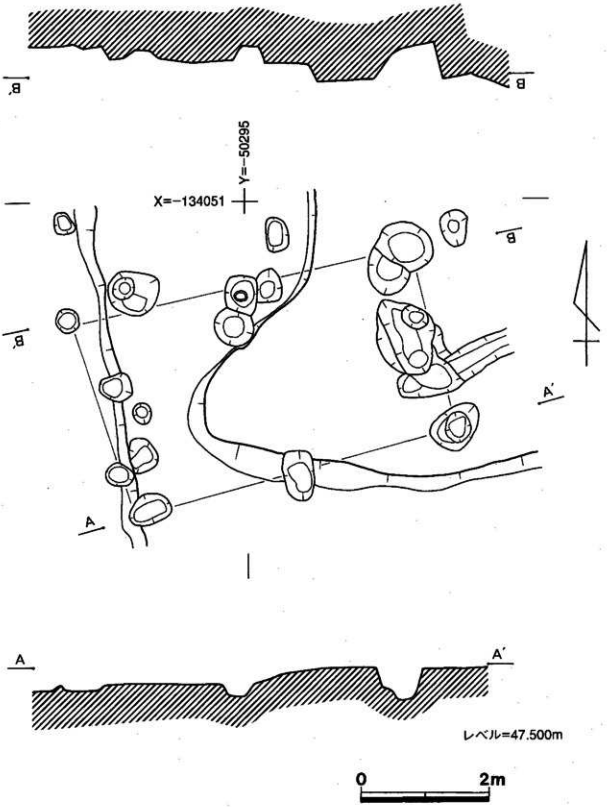
第12図 SB-10 実測図



第13図　SB−11　実測図



第14図　SB-12 実測図



第15図　SH−1 実測図

7号住居跡（SB−7）（第10図・図版4）

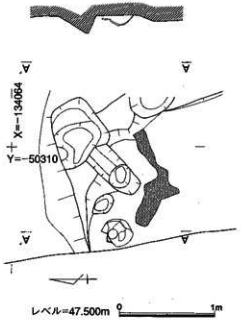
調査区2A〜2B（X＝−134070、Y＝−50310）境付近で検出された。平面の形状は、隅丸方形を呈し、南北4.0m、東西1.5m以上である。住居跡内東辺部で焼土が検出されている。柱穴と推定される小穴は検出されなかった。住居跡内からは、調査区壁面に沿い、床面直上で胴部上半部を欠失し反転した状態の壺（35）が1点出土している。

8号住居跡（SB−8）（第10図・図版4）

調査区2A・3A・2B・3B（X＝−134070、Y＝−50310）で検出された。平面の形状は、隅丸方形を呈し、南北3.5m、東西3m以上である。中央より北寄りに地床炉が検出されている。小穴が8基住居内から検出されているが、このうち、柱穴に該当するものは北東、南西隅の小穴と考えられる。これらの小穴はいずれも床面から平均20cm前後の深さを測る。

9号住居跡（SB−9）（第11図・図版4）

調査区1A・1B（X＝−134052、Y＝−50310）で検出された。平面の形状はやや円形をなすものと推定される。東西2.8m以上、南北3m以上と思われるが、3号墳の周溝により切断されていることを考えると、4m程度におさまっているものと推定される。炉跡は北寄りに検出された。小穴は3基ほどみられるが、いずれも床面から30cm程度の深さである。



第16図　SB−7 土器検出状況図

10号住居跡（SB−10）（第12図・図版5）

調査区3B（X＝−134070、Y＝−50310）で検出された。平面の形状は、隅丸方形を呈し、南北3.2m、東西3.5mを測る。中央よりやや東寄りに地床炉が検出されている。小穴が2基住居内から検出されているが、柱穴に該当するものは検出されなかった。SB−7、SB−8、SB−10の3軒は重なり合って検出されており、このうちSB−7が最新のものであることが判明した。

11号住居跡（SB−11）（第13図・図版5）

調査区3B・4B（X＝−134080、Y＝−50310）で検出された。平面の形状は、円形を呈し、幅1.4m、深さ10cmの溝がC形に巡る状態で検出された。途切れた溝と溝の間には、幅10cm程度の細い溝が検出された。内径は南北3.3m、東西2.8mである。やや北寄りに地床炉が検出されている。溝内から径30cm、深さ35cmほどの穴が検出されており、このうち、4基が柱穴に該当するものと推定される。

12号住居跡（SB−12）（第14図・図版5）

調査区3C・3D（X＝−134080、Y＝−50290）で検出された。平面の形状は、隅丸方形を呈し、南北4.6m以上、東西6.0mを測る調査区内では最大の住居跡である。中央と思われる位置に地床炉が検出されている。小穴が3基住居内から検出されている。深さは床面から20cmほどである。幅20cm、深さ10cmの壁溝が北側から東辺にかけて検出された。

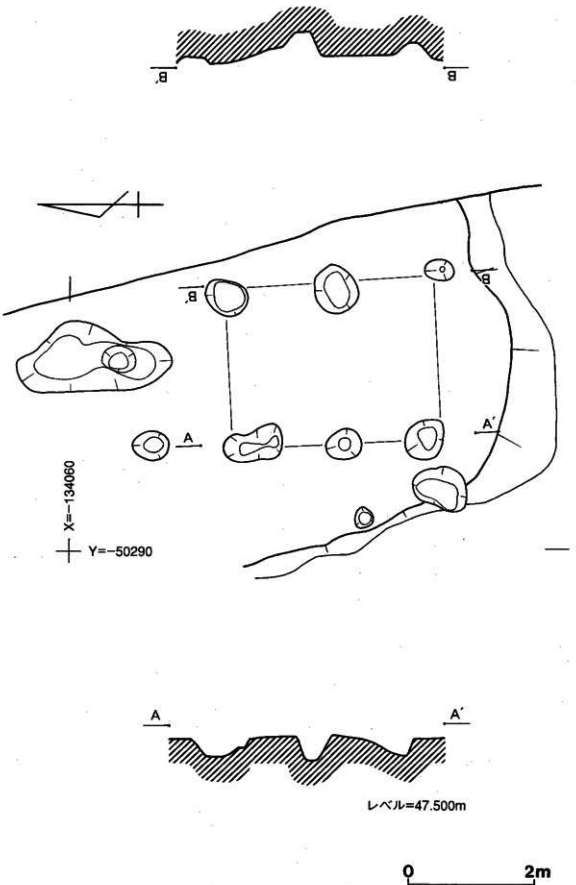
(2)掘立柱建物跡（第4・15・17図・図版8）

掘立柱建物1（SH−1）（第15図・図版8）

調査区1C（X＝−134051、Y＝−50295）で検出された。SB−1内の柱穴と一部重複する1間×2間の掘立柱建物跡である。新旧関係からSH−1がSB−1より新しいと判断される。規模は、柱間が南北3m、南北2.5mを測る、東西に長い倉庫であったと推定される。

掘立柱建物2（SH−2）（第17図）

調査区2D（X＝−134060、Y＝−50290）で検出された、1間×2間の掘立柱建物跡である。柱間



第17図　SH−2　実測図

は東西2.5m、南北1.5mを測る南北に長い倉庫であったと推定される。

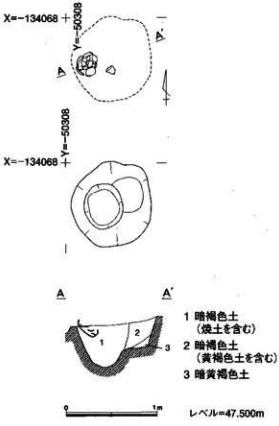
⑶古　　墳（第20～24図・図版10・11・12）

1号墳（第20図・図版10・11・12）

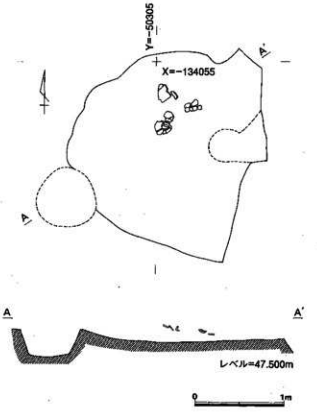
調査区1C（X＝－134050、Y＝－50300）で検出された。現況南北9m以上、東西9.5mの方墳と推定される。周溝幅2～2.5m、深さ25cmを測る。盛土状の高まりが検出されたが、古墳に伴うものか否か不明である。ここからは弥生土器が多量に出土している（第29～32図）。堆積状況は、ブロック状の塊を積み重ねた状況が推定されるが、多量の土器を包含し、しまりのない層であることから、古墳に伴わない盛土と判断した。

2号墳（第21図・図版10・12）

調査区1D・2D（X＝－134060、Y＝－50290）で検出された。現況、径9mの円墳と推定される。周溝幅2.5m、深さ15cmを測る。1号墳との新旧関係から、2号墳が先行して築造されたことがわかる。



第19図　SK－1　実測図



第18図　SX－1　実測図

3号墳（第22図・図版11）

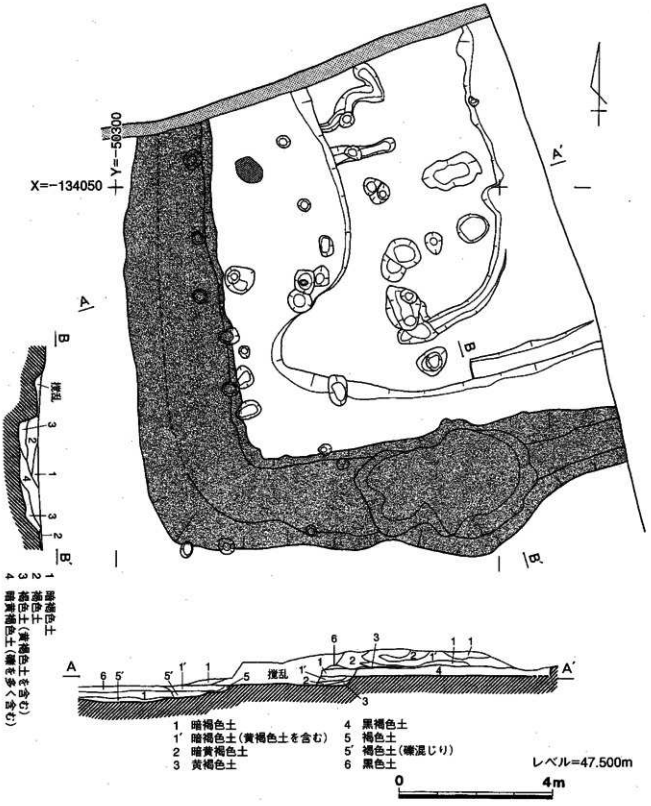
調査区1B（X＝－134050、Y＝－50310）で検出された。現況南北8.6m以上、東西8.9m以上の方墳と推定される。周溝幅1.0m、深さ15cmを測る。周溝において、1号墳との新旧関係は認められなかった。

4号墳（第23図・図版11）

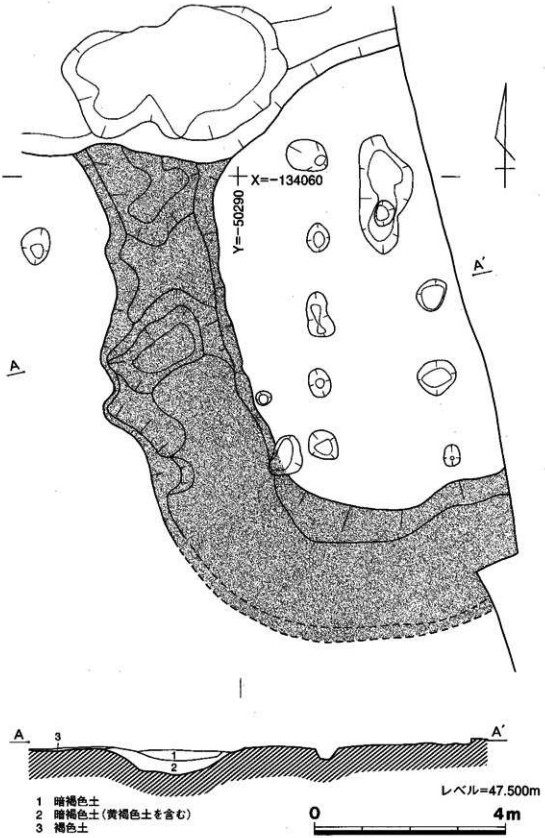
調査区2B・3B（X＝－134070、Y＝－50310）で検出された。現況南北9.6m、東西7.2m以上の方墳と推定される。周溝幅1.6～2.0m、深さ17cmを測る。周溝において、3号墳との重複関係は認められなかった。

5号墳（第24図）

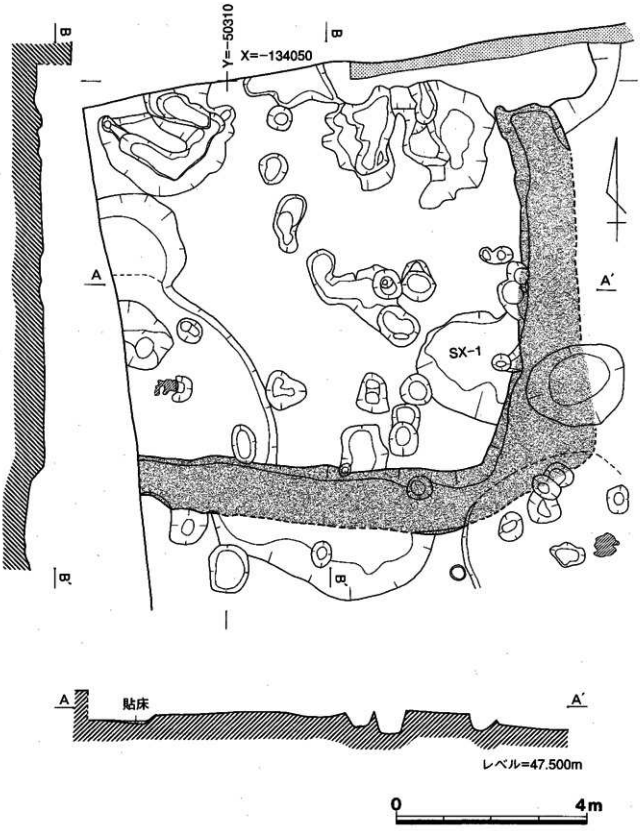
調査区3C・4C（X＝－134080、Y＝－50300）で検出された。調査区の南端において検出した東西15.2m以上、南北8.4m以上の直線的な辺が認められたため、全体の大きさを確認できないが、方形墳と推定できるものである。


X=−134050
Y=−50300
A
A'
B
B'
撹乱
1 暗褐色土
1' 暗褐色土(黄褐色土を含む)
2 暗黄褐色土
3 黄褐色土
4 黒褐色土
5 褐色土
5' 褐色土(礫混じり)
6 黒色土
レベル=47.500m
0
4m

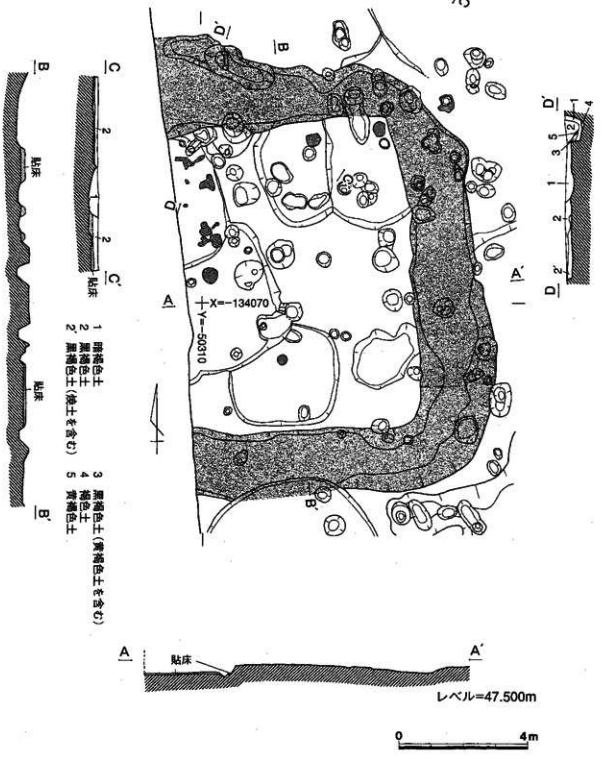
第20図　1号墳実測図


X=−134060
Y=−50290
A
A′
A
A′
3
1
2
レベル=47.500m
1 暗褐色土
2 暗褐色土（黄褐色土を含む）
3 褐色土
0
4m

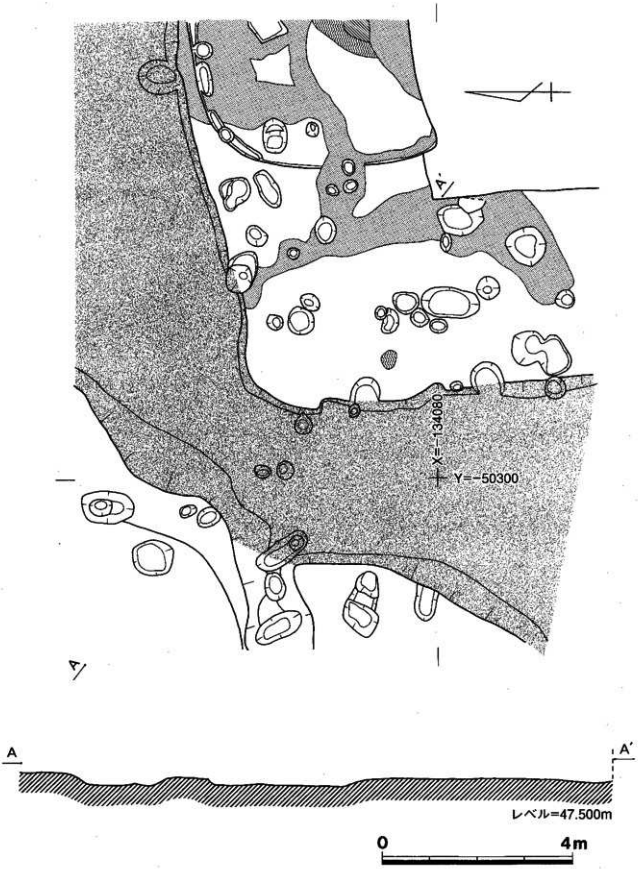
第21図　2号墳実測図



第22図　3号墳実測図


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
X=-134070
Y=-50310
貼床
1 暗黒色土
2 黒褐色土
2 黒褐色土(焼土を含む)
3 黒褐色土(黒褐色土を含む)
4 黒褐色土
5 黒褐色土
レベル=47.500m
0
4m

第23図　4号墳実測図



第24図　5号墳実測図

周溝と思われる溝は幅2.8～3.2m、深さ20cmを測る。これを古墳とすれば、調査区の中では、最大の大きさとなる。

(4)その他の遺構（第10・18・19・22図・図版8・9）

不明遺構1（SX-1）（第18・22図・図版8）

調査区1B（X＝－134055、Y＝－50305）で検出された。土器が散在した状況で検出され、下部に浅い掘り込みが確認された。この掘り込みと直接関係があるか否か不明である。

土坑1（SK-1）（第10・19図・図版9）

調査区2B（X＝－134068、Y＝－50308）で検出された。SB－8に東接して検出された土器廃棄土坑である。径88cm、深さ28cm、46cmの段構造をなしている。ここからは、ほぼ完形の台付甕形土器（第28図59）が検出されている。土坑上面に口縁部の一部が露出していた。胴部内部には口縁から胴下部破片が落ち込み、台部は胴部と分離し、土坑の最下部から反転した状態で出土している。これらの状況から土器を埋納した状況は示していないと判断される。

2　遺　　物（第25～35図・図版13～22）

今回の調査で出土した土器は、コンテナ（内寸①長さ53.5cm×幅34.0cm×深さ15.0cm、14箱②同、深さ20.0cm、6箱③同、深さ29.0cm、2箱）で、合計22箱を数える。破片数が多く、全てを紹介することができないが、特徴のある文様等を持つ土器を可能な限り実測して、掲載することとした。

以下、順次説明することとする。なお、土器の計測値や色調等は観察表として第2表に記した。

1・2は、SB－1から出土した壺破片である。1は折り返し口縁で、口唇部に刻目をもつ。断面は、長方形を呈す。2は肩部付近の破片で、櫛描押圧横線、羽状刺突文が施される。

3・4は、SB－2から出土した壺破片である。3は肩部付近の破片で、羽状刺突文が施される。4の外面には、櫛描横線と羽状刺突文を施した後、円形浮文を貼付が認められる。内面には、粘土輪積痕、指頭痕がみられる。

5～8はSB－3から出土した土器破片で、5は壺の肩部付近の破片である。外面には羽状刺突文が2段に渡り施される。内面には輪積痕がみられる。6は、台付甕の台部である。7は壺の底部片で、葉脈痕がみられる。8は壺の肩部付近の破片で、外面に羽状刺突文を施した後、円形浮文を貼付する。内面に輪積痕がみられる。

9～13はSB－4から出土した土器破片である。9は壺の口縁部の破片で、端部に刻目をもつ。10は細頸形の口縁部から頸部にかけての破片で、頸部に羽状刺突文が2段施される。内外面とも口縁端部にナデ調整が施され、内面頸部には指頭痕がみられる。11は端部を折り返した壺の口縁部破片で、内面に羽状縄文を施す。12は端部を折り返した壺の口縁部破片で、端部に刻目を施している。13は大型の壺の体部片で、肩部に有段羽状文を施している。外面は摩滅して不鮮明であるが、下部に斜方向に結節縄文が施されている。内面には、頸部との接続部に有段の輪積痕がみられる。ヨコハケ調整が施されている。

14～19はSB－5から出土した、壺の破片である。14は口縁端部破片で、折り返しがみられる。端部に刻目を施す。15は肩部破片で、有段羽状文を施している。断面は三角形を呈している。内面には、指頭痕がみられる。16は頸部付近で羽状文を施し、17は口縁端部に刻目をもつ。18は胴下半部、19は胴上部の破片である。

20～27はSB－6から出土した土器破片で、20～25・27はいずれも壺の破片である。20は口縁部破片で、内面に斜方向の縄文を施す。21は頸部破片で、円形浮文を貼付する。22は頸部破片で、縄文が施される。23は肩部破片で、羽状文を施す。24は胴上半部破片で、縄文を施す。25は胴部破片で、外

面をタテハケ調整後、波状文を施している。内面には輪積痕、指頭痕がみられる。26は鉢の破片で、口縁端部を折り返し、有段を呈す。下半部を丸く整形しており、外面はハケ調整を施す。27は肩部の破片で、羽状文を施す。

28～37はＳＢ－７から出土した土器破片である。28は口縁部破片で折り返しがみられる。端部の上下に刻目を施す。29は口縁部の破片で縄文を施した後、円形浮文を貼付している。外面はハケ調整を施している。30は広口の甕で、頸部を「く」の字に曲げ、端部を丸くおさめている。内外面に指頭痕が残る。31は甕の底破片で、やや尖底を呈す。32は甕の上半部破片で、頸部を「く」の字に曲げる。端部は丸く仕上げる単純口縁である。外面にはハケ調整が施され、内面の口縁部もハケ調整が施されている。輪積痕と指頭痕がみられる。33は壺肩部破片で、34、35は胴下半部破片である。下膨れタイプである。35は、住居跡から伏せた状態で出土したものである。36は壺の肩部破片で、羽状文を施している。37は同じく頸部下半付近の破片で、櫛描波状横線が施されている。

38～44はＳＢ－８から出土した土器破片で、38は壺肩部破片である。羽状文と横線が施されている。39は猪口形の碗状の土器で、手捏ね土器と推定される。ハケにより調整を施した痕跡がみられる。40は壺の口縁部破片である。折り返しがみられ、端部に刻目を施す。41は壺の胴部破片で、斜方向に縄文が施されている。また、内面に指頭痕がみられる。42は台付甕の台部である。43は広口壺である。外面頸部付近はタテハケ調整後、胴部にミガキが施されている。内面はヨコハケ調整が施されており、底部付近に指頭痕がみられる。44は壺の胴部破片で、外面はハケ調整後、ミガキが施されている。内面はハケ調整が施されている。

45～47はＳＢ－11から出土した壺破片である。45は口縁部、46、47は肩部付近で羽状文が施されている。

48～53はＳＢ－12から出土した土器破片である。48は壺肩部付近の破片で、羽状文を施している。49は壺口縁部破片で、内面に櫛描扇形文を施している。50は壺底部破片である。51は甕の台部で、外面タテハケ、内面ヨコハケ調整を施す。52は壺の肩部破片で、羽状文を施す。53は台付甕の台部である。外面はハケ調整を施す。

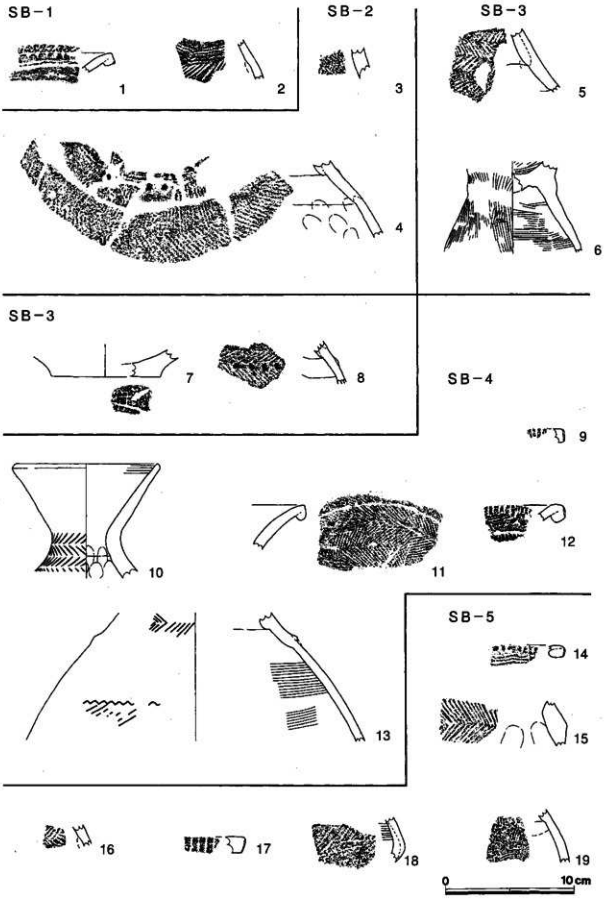
54～57は皿状を呈したＳＸ－１から出土した土器破片である。54は壺の口縁部である。口唇部がやや内湾する。55は壺の頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は大きく外反し、端部はやや尖る。56は壺頸部から肩部破片である。外面には羽状文が認められ、内面には輪積痕、指頭痕を残す。57は細頸の長頸壺で、外面肩部付近に斜方向に縄文を施しているが、摩滅していて明瞭ではない。内面には輪積痕、指頭痕が見える。

58はＳＢ－７から出土した、壺の底部破片である。底に葉脈痕が見られる。

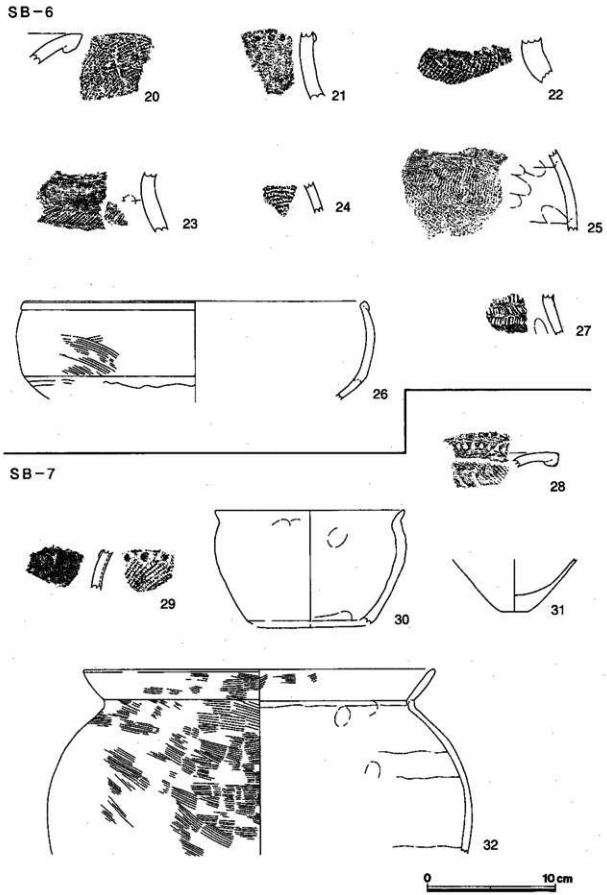
59はＳＫ－１（ＳＢ－８に東接して掘られた土坑）から出土した土器で、ほぼ完形の台付甕である。台部には受熱のため朱色を呈す部分があり、これより上部の胴部下半には煤が付着している。外内面ともにハケ調整を施している。尚、土坑内からは、台部と胴部を繋ぐ破片は発見されていない。

60～143は、１号墳の盛土内から出土した土器群である。尚、この盛土については、後世の盛土と推定している。この根拠については既述した（Ｐ24）。

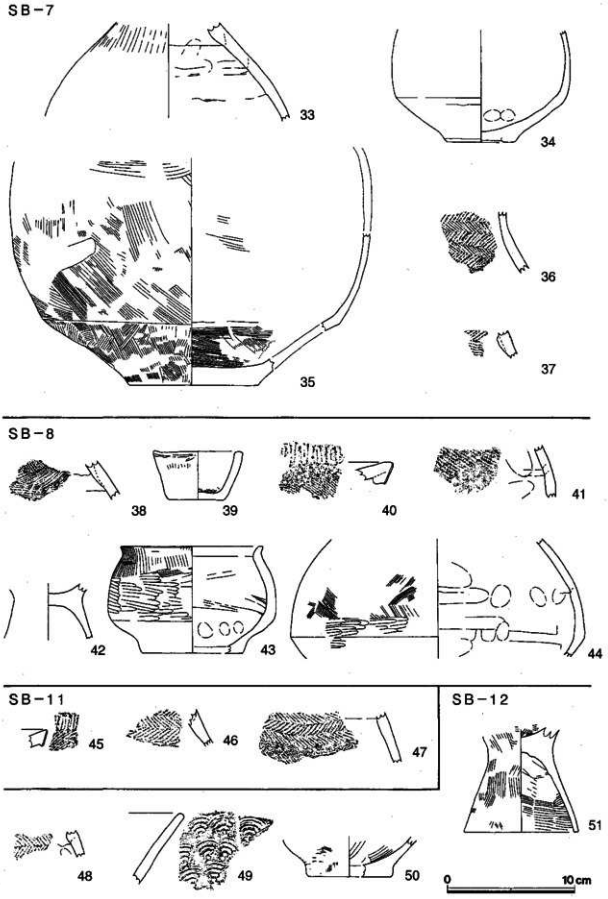
60～109までのうち、87～90までを除き、全て壺の口縁部から肩部までの破片である。60は口縁端部に格子目状沈線を施した、大型の壺の口縁部破片である。粘土帯を芯とし、口縁部を折り返したと思われる痕跡を断面で観察することができる。61～64と66、67は折り返し口縁である。端部に刻目をいれるものと、沈線を施しているものとに分かれる。65の内面には縄文、68には櫛描横線が認められる。69は内面に結節縄文を施す。70～86は、壺の肩部破片である。70は明瞭ではないが、斜方向の縄文が施される。72は内面に整形痕がみられる。108は横線の間に山形文を施文されている。72，108はその



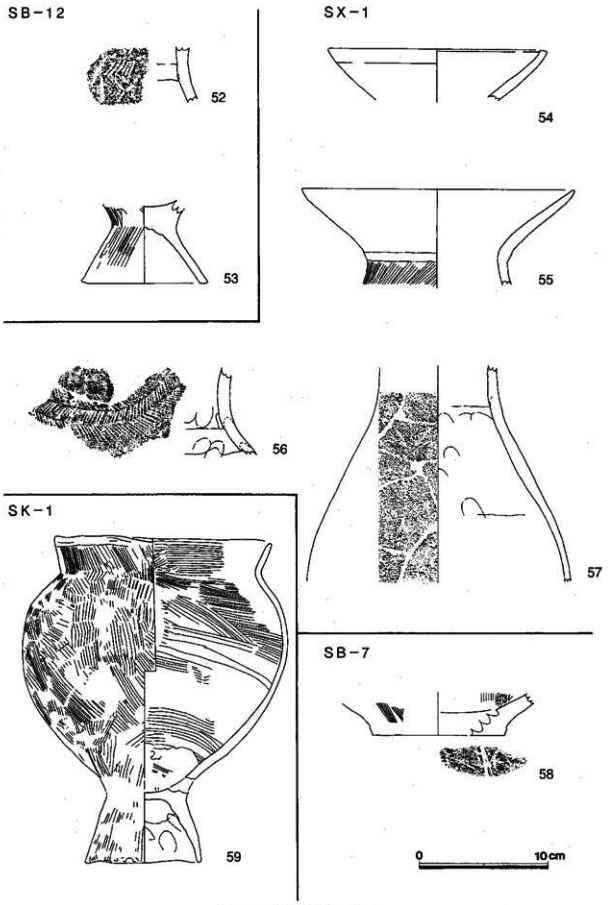
第25図　出土遺物実測図(1)



第26図　出土遺物実測図(2)



第27図　出土遺物実測図(3)



第28図　出土遺物実測図(4)

形状や施文から古式土師器と思われる。このほか、95、101を除き、すべて羽状文が施されている。中でも、81は断面三角形の凸帯上に文様を付し、83は円形浮文を貼付している。95，101は流線文が施されている。87～89は台付甕の台部である。内外面ともにハケ調整が施されている。90は、高杯の脚部と推定される土器で、羽状文が施されている。110～113は壺で、110、112は胴部破片、いわゆる算盤玉形を呈するものである。外面にはハケ調整、内面には指頭痕、輪積痕を残す。111，113～115は壺底部で、葉脈痕を残す。116も同じく壺底部であるが、絞り上げた形状をなす。117～139は甕で、口縁部に刻目をもつタイプともたないタイプの２種に分けることができる。前者には117～131、後者には132、133が該当する。口縁部断面形は方形、尖形をなすものがある。132は前者、133が後者に当たる。尚、刻目をもつタイプは断面が方形のものがほとんどである。134，135は壺である。134は胴部で球形をなす土器で、外面はハケ調整を施す。135は肩部の破片で、羽状文、波状文、斜位の縄文の組合せで施文を行っている。内面には指頭痕、輪積痕を残す。136は甕の胴部片で、外面は荒いハケ調整を施す。137～139は台付甕の台部で、断面から137のように胴部と台部を別個に作るタイプと一体で作るタイプの２種があることがわかる。139は不明である。140～142は高杯である。140は口縁端部に刻目を施し、内面の口縁部周辺にはミガキが、外面の一部にもミガキが施されている。141，142は脚部で、142の外面に羽状文が施される。143は鉢の口縁部破片と思われる。

144，145は１号墳周溝から出土した壺破片である。144は口縁端部に格子状に刻みを施しており、145は頸部片で羽状文を施す。

146～151は３号墳上の地山直上から出土した。146，147は壺肩部破片である。いずれも斜位の縄文を施す。148は小型の鉢と思われるもので、端部を丸くおさめ、球状を呈す。149は壺の胴部下半で、やや算盤玉状を呈している。内面には接合痕がみられる。150，151は壺の底部である。

152～169は３号墳周溝から出土した土器である。152～168はいずれも壺の破片で、152は、口縁端部と口縁部に山形に刻目を施す。153には口縁部外面に連続して、縦方向の刻目が施されている。駿河系の施文方法と思われる。154は壺の肩部付近の破片で、羽状刺突文が施されている。155～159，162～165は肩部片で、羽状文、円形浮文、縄文が施されている。160は頸部から胴部の土器で、161は胴部下半の土器である。161の下部には、ミガキが見られ、内面に接合痕を残す。166には、二条の横線の間に山形文が認められる。167には流線文が施されている。168は頸部片で、焼成不良のためか器面の縄文が見えにくい。かろうじて、斜位の縄文が施されていることがわかる。169は器台と思われ、脚部に円形の穿孔が１孔見られる。

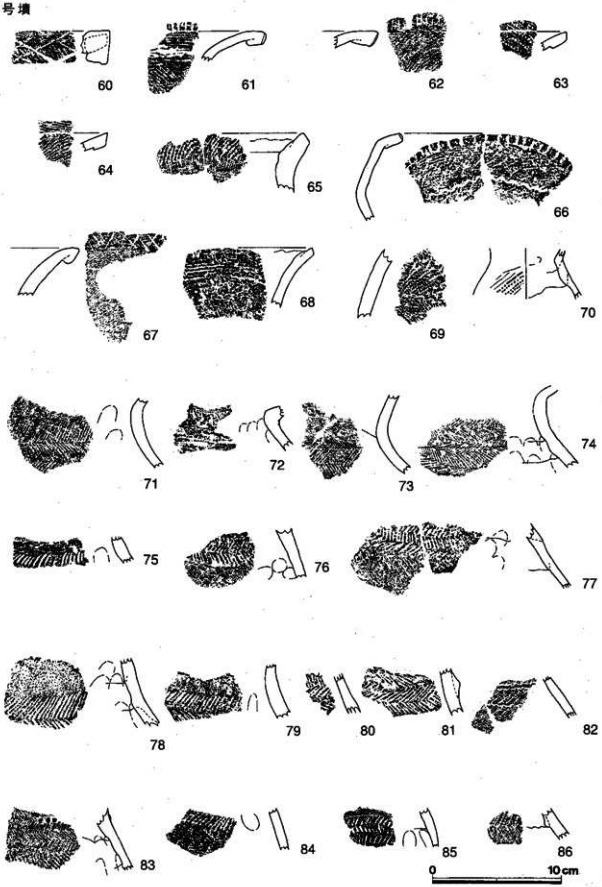
170～179は４号墳周溝から出土した土器群である。170は壺の口縁部で、刻目を施す。171には同じように刻目が施されている。172には、縄文が施されている。173、176には、横線と山形文の組合せが認められる。他の土器には羽状文、縄文が施されている。

180～221は、表土もしくは地山直上からの出土で、遺構に伴わない土器である。いずれも施文は羽状文、縄文を施し、円形浮文を貼付するものもある。

なお、217、218はＳＢ－12の攪乱から出土したかわらけで、形状から江戸時代初頭と考えられる。このほか、39と同様の猪口形の土器が出土している（214）。

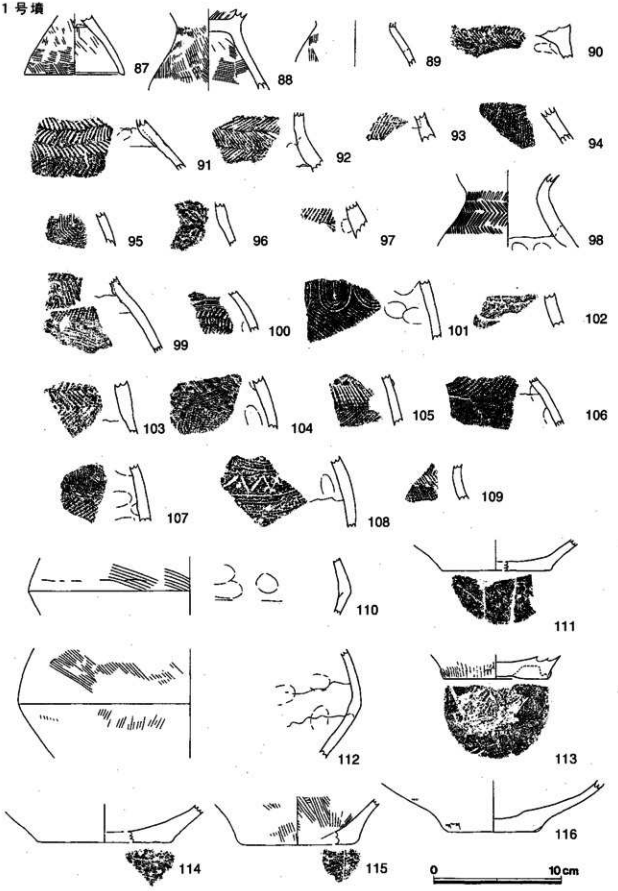
以上のように、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器が出土し、住居跡は弥生時代後期の様相を示しており、古墳はその周溝から出土した土器により古墳時代前期に築造されたものと推定することができる。このことは、過去に調査した高田遺跡の編年観と矛盾することなくおさまっている。

1号墳



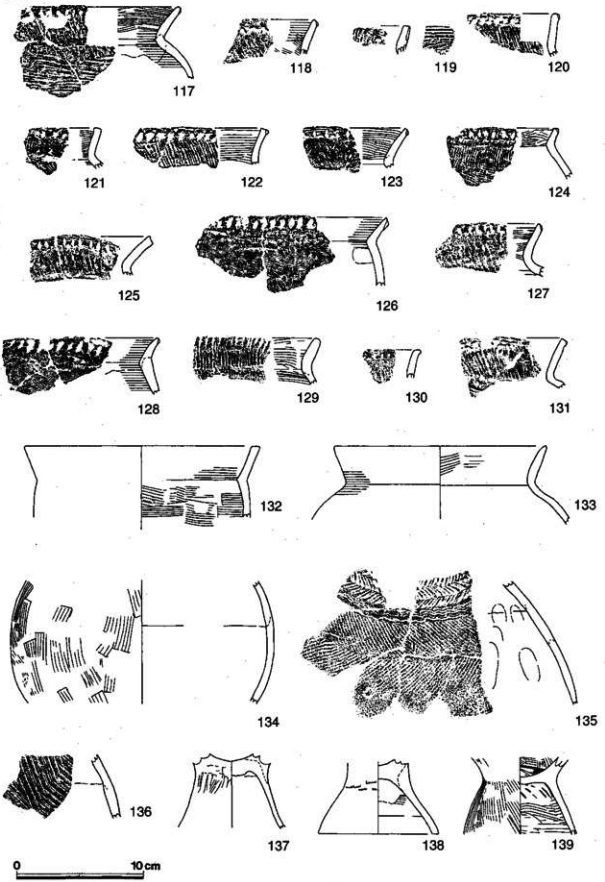
第29図　出土遺物実測図(5)

1号墳



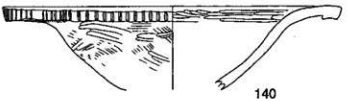
第30図　出土遺物実測図(6)

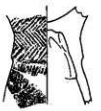
1号墳



第31図　出土遺物実測図(7)

1号墳





1号墳周溝

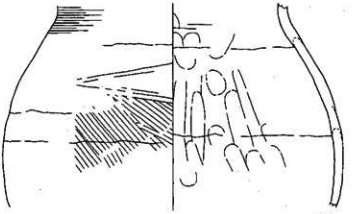
3号墳

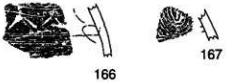
3号墳周溝

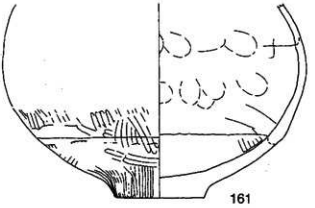
0 10cm

第32図　出土遺物実測図(8)

3号墳周溝



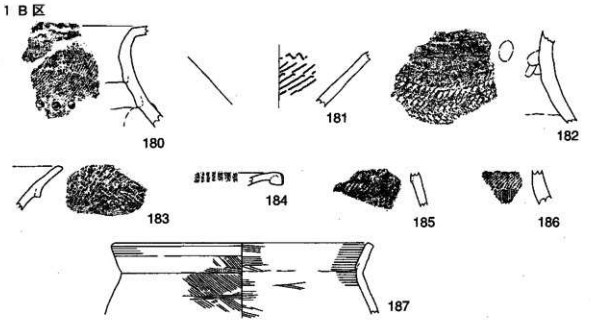




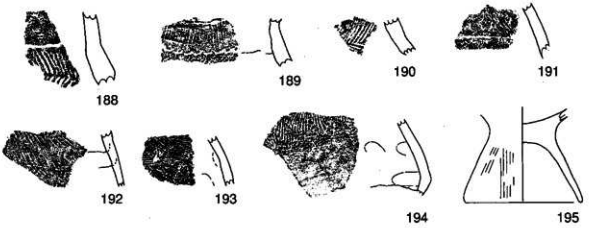
4号墳周溝

第33図　出土遺物実測図(9)

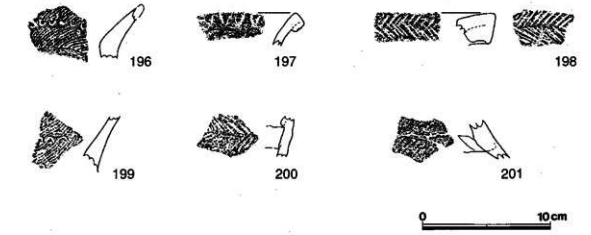
1 B 区



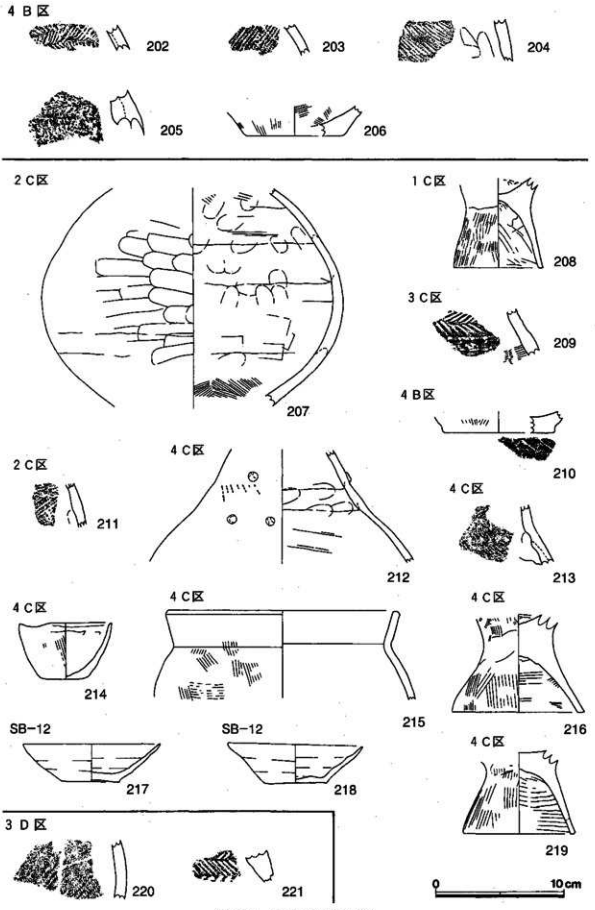
2 B 区



4 B 区



第34図　出土遺物実測図(10)



第35図　出土遺物実測図(1)

Ⅶ まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代に属す遺構と遺物を検出がした。そうしたことから時代に分けてその様子をまとめたい。

弥生時代

弥生時代後期の住居跡12軒が検出された。平均した大きさは、南北３～４ｍ×東西３～４ｍで、東遠江における平均的な大きさを示しているものと考えられる。形状は隅丸方形を呈し、炉は中央よりややずれた北側につくられている。出土土器から弥生時代後期（菊川式）の住居跡と考えられる。

今までに高田遺跡内で検出された竪穴住居の数に、今回の調査で検出した数を合わせると、総数は90軒となる。掘立柱建物の総数は16棟で、竪穴住居５～６軒に付き、１棟の掘立柱建物という比率になる。東遠江における竪穴住居と掘立柱建物の組合せ構成数は、竪穴住居３～４軒に対して掘立柱建物１棟と推定されており、今回の高田遺跡の検出した数値は、やや高めである。今後の動向をみたい。

立地という面で考えてみると、当該調査地は原野谷川を見下ろした高位置にあり、水田経営を営むには決して好条件の場所とは言えない。しかし、発掘調査の成果からは、幾つかのまとまった単位（５～６軒？）でこの和田岡原に集落をなしていた様子を窺うことができる。

現況では、水田は台地から見下ろした位置に形成され、住居は台地に築くという風景が描かれる。身近な沖積地に住居を構え、田経営をするという選択ができなかった環境があったのであろうか。

古墳時代

国指定史跡「和田岡古墳群」に近接する本調査地は、古墳群のあり方を考慮する上で、欠くことのできない地点である。市指定史跡「東登口古墳群」は、現況で墳丘を確認できる唯一の小古墳群である。調査履歴はないが、周辺の調査から少なくとも古墳時代中期にまで遡る古墳と考えられている。第３次調査地点では、７基の土坑墓群が検出された。いわゆる、墳丘を持たない墓群（第36図）である。副葬品は、大刀や刀子、鎌など小規模古墳出土のものと変わらない副葬品が出土している。この他、南側で調査した第１次調査地点では方墳と推定される周溝を確認している。周溝からは前期の遺物が出土している。

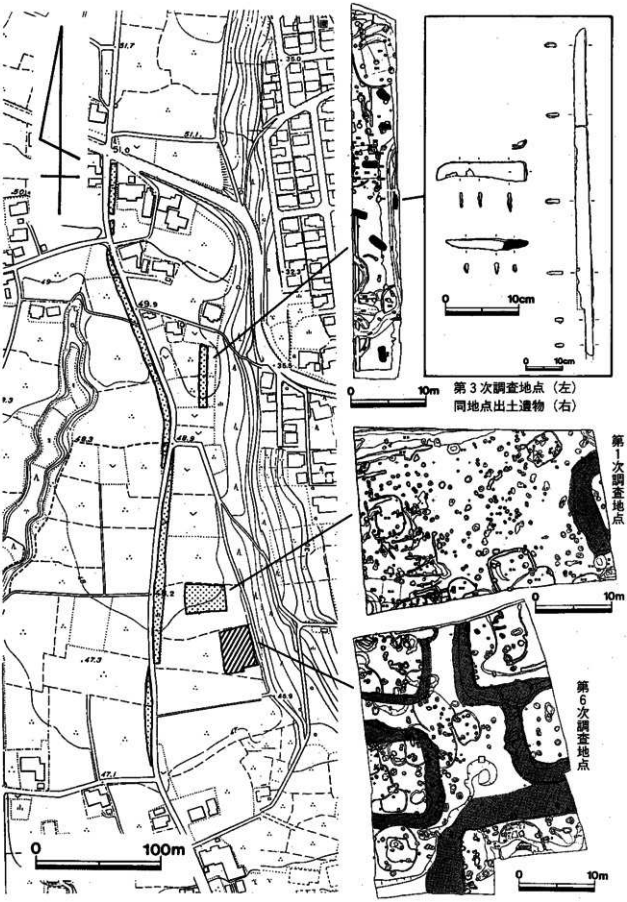
今回の調査では、方墳を主体としながらも、円墳も築造されているという様子を知ることができた。築造時期は、周溝から出土した土器によると古墳時代前期（廻間Ⅱ式）が当てられる。

これらの様相から、当該地域周辺には、①土坑墓群の墓域、②方墳・円墳の墓域が認められ、現況では①が台地東縁部北寄り分布し、②がその南寄りに分布していることが推定されている。その後、中期になると吉岡大塚古墳、行人塚古墳など大古墳が周囲に築造されることとなる。

弥生時代から古墳時代へ

以上の成果から、弥生時代から古墳時代の変遷を推定してみよう。まず、台地東縁部に築かれた弥生時代後期の集落は、台地眼下の沖積地に水田を求め稲作経営していたことが推察された。古墳時代前期になると、同地に古墳が築かれることとなり、集落は別の場所へ拠点を移すことになる。集落地と墓地を別地点に求め、集落の拠点を南下させた（女高Ⅰ遺跡へ？）可能性も考えられる。

しかし、中期になって大型古墳を築きあげるほどの大集落を台地上に築くことはおそらく困難で、むしろ広大で肥沃な沖積地に求められないだろうか。これは、吉岡大塚古墳が台地内陸部に位置していることを除き、他の古墳が台地東縁部にあって眼下に集落を見下ろす位置に築かれていることがそ



第36図　高田遺跡遺構分布図

れを裏付けているものと考えられるからである。

和田岡古墳群が築かれた背景を推察していくには、高田遺跡、女高Ⅰ遺跡、溝ノ口遺跡など弥生時代から古墳時代にかけて営まれた集落跡について、これまでの調査成果を立地、景観など総合的な見地で吟味する必要があろう。

《参考文献》

『静岡県における弥生時代集落の変遷』 2002　静岡県考古学会

第２表　出土土器観察表

図版番号	器種	出土地点	法量 口径(cm)	最大径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	壺	ＳＢ－１					黄褐色	緻密	良好	
2	壺	ＳＢ－１					外:黄褐色 内:暗褐色	緻密	良好	
3	壺	ＳＢ－２					黄褐色	緻密	良好	
4	壺	ＳＢ－２					褐色	緻密	良好	
5	壺	ＳＢ－３					褐色	１～２㎜の小石を少量含む（赤色粒子含）	良好	
6	甕	ＳＢ－３					暗赤褐色	緻密	良好	
7	壺	ＳＢ－３				(8.5)	褐色	緻密	良好	
8	壺	ＳＢ－３					褐色	緻密	良好	
9	壺	ＳＢ－４					黄褐色	緻密	良好	
10	壺	ＳＢ－４	(11.1)				灰褐色(黄色が強い)	１～２㎜の小石を多量に含む	良好	
11	壺	ＳＢ－４					褐色	緻密	良好	
12	壺	ＳＢ－４					明褐色	赤色粒子を含む・緻密	やや良	
13	壺	ＳＢ－４					黄褐色	緻密（赤色粒子含）	やや不良	
14	壺	ＳＢ－５					褐色	緻密	良好	
15	壺	ＳＢ－５					暗褐色	緻密	良好	
16	壺	ＳＢ－５					赤褐色	緻密	良好	
17	壺	ＳＢ－５					黒色　部黄褐色	緻密	良好	
18	壺	ＳＢ－５					黄褐色	緻密	良好	
19	壺	ＳＢ－５					外:褐色 内:暗褐色	２～３㎜の砂粒子を含む	良好	
20	壺	ＳＢ－６					褐色	緻密	良好	
21	壺	ＳＢ－６					外:淡褐色 内:黒褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	やや良	
22	壺	ＳＢ－６					暗褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
23	壺	ＳＢ－６					淡黄褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
24	壺	ＳＢ－６					暗黒色	緻密	良好	
25	壺	ＳＢ－６					明褐色	２～３㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
26	鉢	ＳＢ－６	26.7				淡黄褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	やや良	
27	壺	ＳＢ－６					赤褐色	緻密	良好	
28	壺	ＳＢ－７					明褐色	緻密	良好	
29	壺	ＳＢ－７					褐色	１～２㎜の小石を多く含む	良好	
30	鉢	ＳＢ－７	(14.8)				赤褐色	２～５㎜の小石を含む	不良	
31	甕	ＳＢ－７				2.0	赤褐色	１～２㎜の小石を多量に含む	やや良	
32	甕	ＳＢ－７	(27.4)				褐色	２～５㎜の小石を含む（赤色粒子含）	良好	
33	壺	ＳＢ－７					赤褐色	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
34	壺	ＳＢ－７		(14.0)		5.3	黄褐色	１～２㎜の小石を少量含む（赤色粒子含）	やや良	
35	壺	ＳＢ－７				10.0	暗褐色	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
36	壺	ＳＢ－７					赤褐色	緻密	良好	
37	壺	ＳＢ－７					赤褐色	緻密	良好	
38	壺	ＳＢ－８					赤褐色	２～３㎜の砂粒子を含む	良好	
39	鉢	ＳＢ－８	(7.0)			(3.8)	4.3	暗褐色	緻密	良好
40	壺	ＳＢ－８					黄褐色	２～３㎜の砂粒子を含む	良好	
41	壺	ＳＢ－８					外:黄褐色 内:黒色	緻密	良好	
42	甕	ＳＢ－８					淡褐色	１～２㎜の小石を多量に含む	やや良	
43	壺	ＳＢ－８	11.1	(13.1)	(8.4)	(7.8)	暗褐色(外面:黒渡？)	１～２㎜の小石を多量に含む	良好	
44	壺	ＳＢ－８		(23.0)			褐色	１～２㎜の小石を多量に含む(赤色粒子含)	良好	
45	壺	ＳＢ－11					赤褐色	緻密	良好	
46	壺	ＳＢ－11					赤褐色	緻密	良好	
47	壺	ＳＢ－11					暗褐色	緻密	良好	
48	壺	ＳＢ－12					黄褐色	赤色粒子を含む	良好	
49	壺	ＳＢ－12					外:赤褐色 内:淡褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
50	壺	ＳＢ－12				(6.3)	淡褐色	緻密	良好	
51	甕	ＳＢ－12				9.0	赤褐色	緻密	良好	
52	壺	ＳＢ－12					淡赤褐色	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	やや良	
53	甕	ＳＢ－12				10.0	赤褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
54	高坏	ＳＸ－１	(17.1)				赤褐色	２～３㎜の小石を多量に含む	やや良	
55	壺	ＳＸ－１	21.3				暗黄褐色	砂状微粒子を多量に含む	やや不良	
56	壺	ＳＸ－１					黄褐色	２～３㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
57	壺	ＳＸ－１					黄褐色	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	やや良	
58	壺	ＳＢ－７				(10.2)	暗褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
59	甕	ＳＫ－１	17.0	20.4	25.5	9.2	外:上部黒,下部:褐色 内:暗褐色	緻密	良好	
60	壺	１号項					黄褐色	緻密	やや良	
61	壺	１号項					褐色	緻密	良好	
62	壺	１号項					淡褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
63	壺	１号項					褐色	緻密	良好	
64	壺	１号項					褐色	緻密	良好	
65	壺	１号項					赤褐色	１～２㎜の砂粒子を含む	良好	
66	壺	１号項					淡黄褐色(やや赤色を呈す)	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	やや良	
67	壺	１号項					褐色	緻密	良好	
68	壺	１号項					暗褐色	緻密	不良	
69	壺	１号項					明褐色	２～３㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
70	壺	１号項					赤褐色	緻密（赤色粒子含）	やや良	
71	壺	１号項					暗褐色	１～２㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
72	壺	１号項					淡褐色	緻密（赤色粒子含）	良好	
73	壺	１号項					赤褐色	赤色粒子を含む・緻密	良好	
74	壺	１号項					褐色	２～３㎜の小石を多量に含む	良好	

図版番号	器種	出土地点	法量 口径(cm)	最大径(cm)	高さ(cm)	最薄(cm)	色調	胎土	焼成	備考
75	壺	1号墳					黄褐色	2～5㎜の小石を多量に含む(赤色粒子含)	良好	
76	壺	1号墳					黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
77	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の小石を多量に含む(赤色粒子含)	良好	
78	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の小石を多量に含む	良好	
79	壺	1号墳					明黄色(やや赤色を呈す)	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
80	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の小石を多量に含む	良好	
81	壺	1号墳					淡褐色	緻密	良好	
82	壺	1号墳					黄褐色	1～2㎜の小石を少量含む(赤色粒子含)	良好	
83	壺	1号墳					褐色	緻密	良好	
84	壺	1号墳					暗褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
85	壺	1号墳					暗黄褐色	緻密	良好	
86	壺	1号墳					赤褐色	砂粒子を多量に含む	良好	
87	甕	1号墳				7.8	外:褐色 内:赤褐色	緻密	良好	
88	甕	1号墳					赤褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
89	壺	1号墳					黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
90	高坏	1号墳					明褐色	緻密	良好	
91	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
92	壺	1号墳					淡褐色	緻密	良好	
93	壺	1号墳					赤褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
94	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の小石を多量に含む	良好	
95	壺	1号墳					赤褐色	緻密	良好	
96	壺	1号墳					淡黄褐色	緻密	やや不良	
97	壺	1号墳					暗褐色	2～3㎜の小石を少量含む	良好	
98	壺	1号墳					淡黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	赤彩あり
99	壺	1号墳					明褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
100	甕	1号墳					外:黒色 内:明褐色	緻密	良好	
101	壺	1号墳					外:暗黄褐色 内:灰褐色	緻密	良好	
102	壺	1号墳					赤褐色	緻密	良好	
103	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	やや不良	
104	壺	1号墳					明褐色	緻密	良好	
105	壺	1号墳					外:灰褐色 内:黒褐色	緻密	良好	
106	壺	1号墳					淡褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
107	壺	1号墳					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
108	壺	1号墳					褐色	緻密	良好	
109	壺	1号墳					赤褐色	緻密	良好	
110	壺	1号墳		(25.3)			淡赤褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
111	壺	1号墳				(8.4)	外:赤褐色 内:黒褐色	緻密	良好	
112	壺	1号墳		26.9			暗黄褐色	緻密	良好	
113	壺	1号墳					明褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
114	壺	1号墳				(10.4)	明褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
115	壺	1号墳				(8.2)	明褐色	2～3㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
116	壺	1号墳				6.6	灰白色	1～2㎜の小石を多量に含む	良好	
117	甕	1号墳					暗褐色(煤付着)	1～2㎜の小石を多量に含む	良好	
118	甕	1号墳					褐色	緻密	良好	
119	甕	1号墳					赤褐色	緻密	良好	
120	甕	1号墳					外:黒褐色(煤) 内:褐色	緻密	良好	
121	甕	1号墳					赤褐色	2～3㎜の小石を少量含む	良好	
122	甕	1号墳					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
123	甕	1号墳					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
124	甕	1号墳					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
125	甕	1号墳					暗褐色	緻密	良好	
126	甕	1号墳					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
127	甕	1号墳					褐色	2～3㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
128	甕	1号墳					暗褐色	赤色粒子を含む・緻密	良好	
129	甕	1号墳					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
130	甕?	1号墳					褐色	緻密	良好	
131	甕	1号墳					褐色	緻密	良好	
132	甕	1号墳	(18.5)				褐色	1～3㎜の砂粒子を多量に含む	不良	
133	甕	1号墳	(16.6)				淡黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
134	甕	1号墳		(20.8)			暗褐色	緻密	良好	
135	壺	1号墳					褐色	緻密	良好	
136	甕	1号墳					外:黒色(煤) 内:褐色	緻密	良好	
137	甕	1号墳					暗褐色	緻密	良好	
138	甕	1号墳				9.5	赤褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良好	
139	甕	1号墳					淡黄褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
140	高坏	1号墳	(26.5)				淡黄褐色	緻密	良好	
141	甕	1号墳					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
142	高坏	1号墳					黒褐色	1～2㎜の小石を含む	良好	
143	鉢?	1号墳					明褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良好	
144	壺	1号墳周溝					褐色	2～3㎜の小石を多量に含む	やや不良	
145	壺	1号墳周溝					赤褐色	2～3㎜の小石を少量含む	良好	
146	壺	3号墳					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良好	
147	壺	3号墳					褐色	緻密	良好	
148	鉢	3号墳	(11.5)				褐色	1～2㎜の小石を少量含む	良好	

図版番号	器	種	出土地点	法量 口径(cm)	最大径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
149	壺	3	号 項		(21.2)			黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
150	壺	3	号 項				(8.0)	褐色	2～5㎜の小石を多量に含む	やや不良	
151	壺	3	号 項				5.2	赤褐色	緻密（赤色粒子含）	良 好	
152	壺	3	号境周溝					暗褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
153	壺	3	号境周溝					褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
154	壺	3	号境周溝					外:黄褐色 内:灰褐色	緻密	良 好	
155	壺	3	号境周溝					褐色	緻密	良 好	
156	壺	3	号境周溝					暗褐色	緻密	良 好	
157	壺	3	号境周溝					赤褐色	緻密	良 好	
158	壺	3	号境周溝					外:明褐色 内:褐色	緻密	良 好	
159	壺	3	号境周溝					淡黄褐色	緻密	やや不良	
160	壺	3	号境周溝					黄褐色	1～2㎜の小石を少量含む（赤色粒子含）	良 好	
161	壺	3	号境周溝		(23.7)			淡黄褐色	緻密	良 好	
162	壺	3	号境周溝					赤褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
163	壺	3	号境周溝					暗褐色	緻密	良 好	
164	壺	3	号境周溝					褐色	緻密	良 好	
165	壺	3	号境周溝					褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
166	壺	3	号境周溝					赤褐色	緻密	良 好	
167	壺	3	号境周溝					明褐色	緻密	良 好	
168	壺	3	号境周溝					赤褐色(赤色が強い)	1～2㎜の小石を多量に含む	やや不良	
169	器台？	3	号境周溝					黄褐色	緻密（軟質）	やや不良	
170	壺	4	号境周溝					褐色	緻密	良 好	
171	壺	4	号境周溝					黄褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
172	壺	4	号境周溝					黄褐色	緻密	良 好	
173	壺	4	号境周溝					赤褐色	緻密	良 好	
174	壺	4	号境周溝					褐色	緻密	良 好	
175	壺	4	号境周溝					明褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
176	壺	4	号境周溝					淡褐色	緻密	やや不良	
177	壺	4	号境周溝					暗褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
178	壺	4	号境周溝					外:褐色 内:暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
179	壺	4	号境周溝					外:明褐色 内:黒色	緻密	良 好	
180	壺	1	B 区					褐色	1～2㎜の小石を少量含む（赤色粒子含）	良 好	
181	壺	1	B 区					外:赤褐色 内:暗褐色	1～2㎜の小石を多量に含む	良 好	
182	壺	1	B 区					暗褐色	緻密	良 好	
183	壺	1	B 区					褐色	緻密	良 好	
184	壺	1	B 区					褐色	緻密	良 好	
185	壺	1	B 区					黄褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
186	壺	1	B 区					褐色	砂粒子を多量に含む	良 好	
187	壺	1	B 区	(20.6)				外:暗褐色 内:暗赤褐色	緻密	良 好	
188	壺	2	B 区					外：黄褐色	緻密	良 好	
189	壺	2	B 区					褐色	緻密	良 好	
190	壺	2	B 区					褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
191	壺	2	B 区					外:明褐色 内:褐色	緻密	良 好	
192	壺	2	B 区					暗褐色	緻密	良 好	
193	壺	2	B 区					褐色	緻密	良 好	
194	壺	2	B 区					暗褐色	緻密	良 好	
195	甕	2	B 区				9.2	淡黄褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
196	壺	4	B 区					赤褐色	緻密	良 好	
197	壺	4	B 区					黄褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	やや不良	
198	壺	4	B 区					黄褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
199	壺	4	B 区					褐色	緻密	良 好	
200	壺	4	B 区					暗赤褐色	緻密	良 好	
201	壺	4	B 区					褐色	緻密	良 好	
202	壺	4	B 区					暗褐色	2～3㎜の砂粒子を含む	良 好	
203	壺	4	B 区					暗褐色	緻密	良 好	
204	壺	4	B 区					褐色	緻密	良 好	
205	壺	4	B 区					褐色	緻密	良 好	
206	壺	4	B 区				(7.7)	淡褐色	緻密	良 好	
207	壺	2	C 区		(23.6)			褐色	2～3㎜の小石を少量含む	良 好	
208	甕	1	C 区				7.0	褐色	緻密	良 好	
209	壺	3	C 区					暗褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	良 好	
210	壺	4	B 区				(8.5)	明褐色	赤色粒子を含む	良 好	
211	壺	2	C 区					赤褐色	緻密	良 好	
212	壺	4	C 区					黄褐色	2～5㎜の小石を多量に含む(赤色粒子含)	やや不良	
213	壺	4	C 区					赤褐色	2～3㎜の小石を多量に含む	良 好	
214	鉢	4	C 区	7.2		4.4	3.0	明褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
215	甕	4	C 区	(18.4)				淡赤褐色	1～3㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
216	甕	4	C 区				10.2	淡赤褐色	1～2㎜の砂粒子を多量に含む	やや不良	
217	かわらけ	SB－12		10.7		3.0	4.5	黄褐色	緻密	良 好	
218	かわらけ	SB－12		10.5		3.0	4.8	黄褐色	緻密	やや不良	
219	甕	4	C 区				8.5	褐色	1～2㎜の砂粒子を含む	良 好	
220	壺	3	D 区					外:明褐色 内:灰褐色	緻密（赤色粒子含）	良 好	
221	壺	3	D 区					灰褐色	緻密	良 好	

※法量のうち、（　）内の数値は推定値である。

写 真 図 版

図版1

調査地遠景（西から原野谷川を臨む）

調査地垂直写真（合成写真）

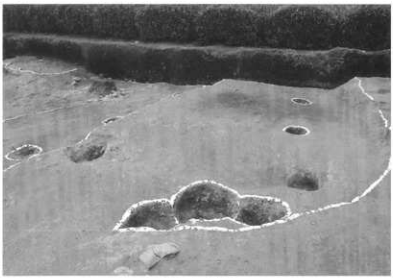
図版2

調査前状況（南東から）

調査地北区西側完掘状況（南から）

SB－1（南から）

図版3



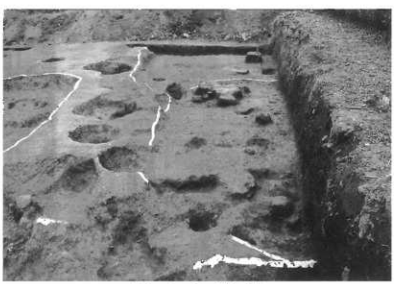
SB－1 近接

SB－2（南から）

SB－3近接（北西から）

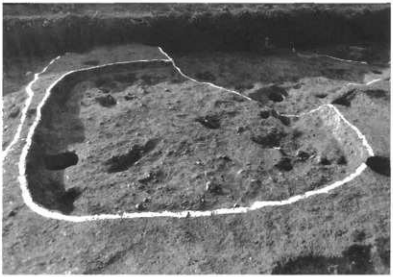
図版4

SB-5・6（東から）



SB-7・8（北から）

SB-9（東から）

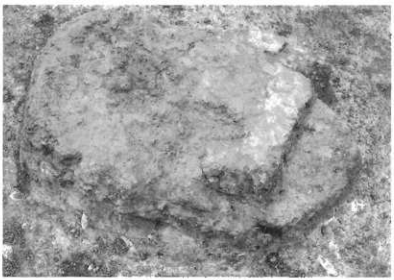


SB-10（東から）

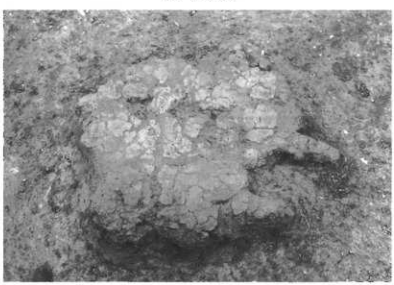
SB-11（北東から）

SB-12（北から）

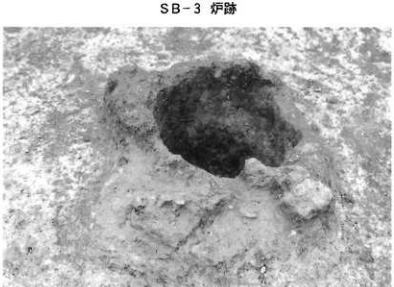
図版6



SB-2 炉跡



SB-3 炉跡



SB-4 炉跡

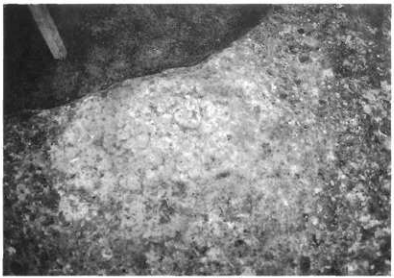
図版7

SB-5 炉跡

SB-6 炉跡

SB-9 炉跡

図版8

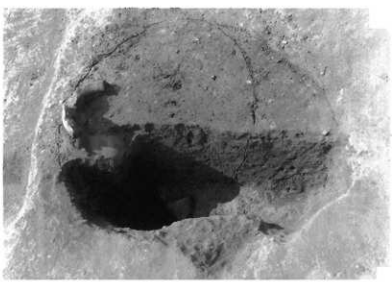


SB-12 炉跡

SH-1（南から）

SX-1 土器検出状況

SB－7 土器検出状況（北から）



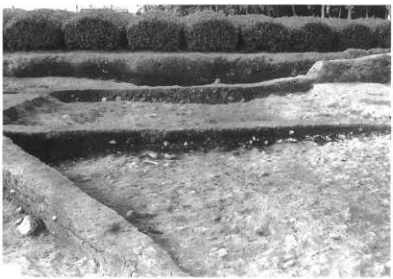
SK－1 半截（南から）

SK－1 完掘（北から）

図版10

1号墳周溝断面南側（南から）

1号墳周溝断面西側（南から）



1・2号墳周溝断面（南から）

1・3号墳遠景（南西から）

1・3号墳及び住居跡群遠景（南西から）

1号墳から4号墳を近接

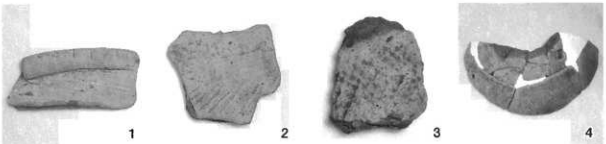
図版12

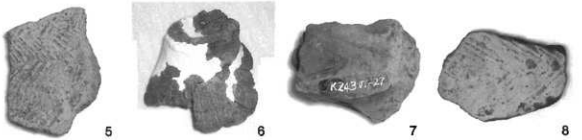
1号墳全景（南から）

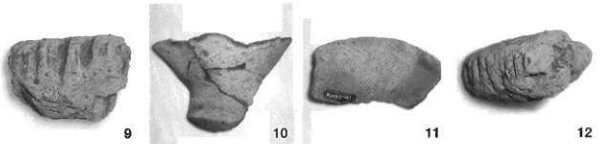
1号墳周溝完掘（東から）

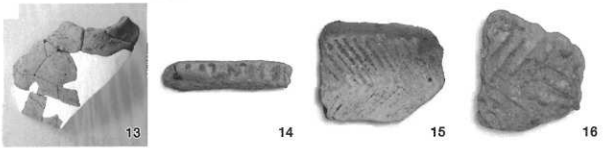
2号墳遠景（南から）

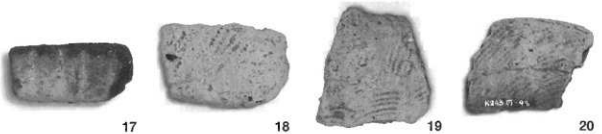
図版13

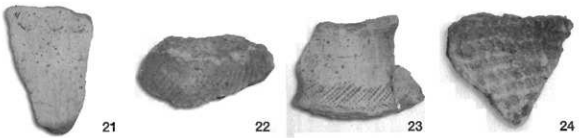






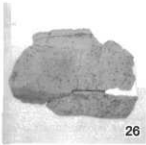






図版14

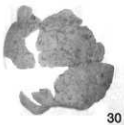
25


26

27

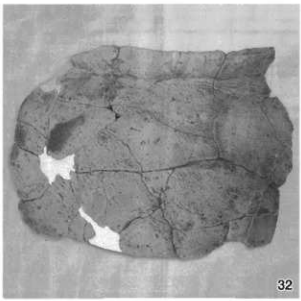
28

29


30

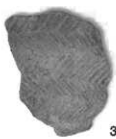
31

33


32

34

35


36

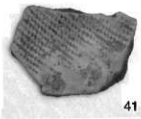
37

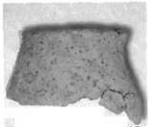
38

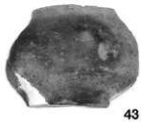
39

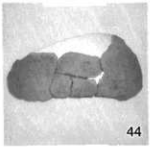
図版15

40


41


42


43

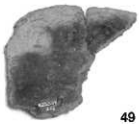

44

45

46

47

48

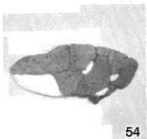

49

50

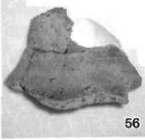
51

52

53


54

55


56

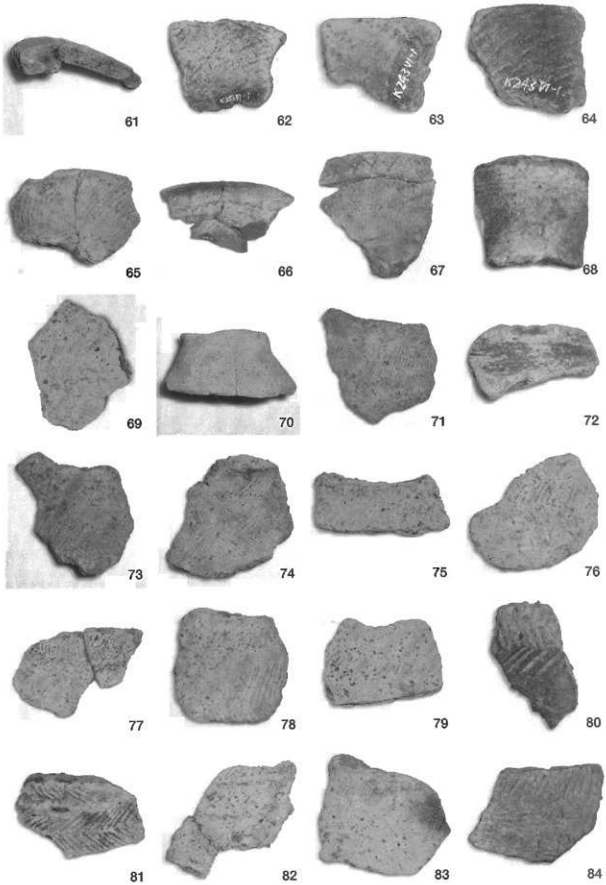
57

59

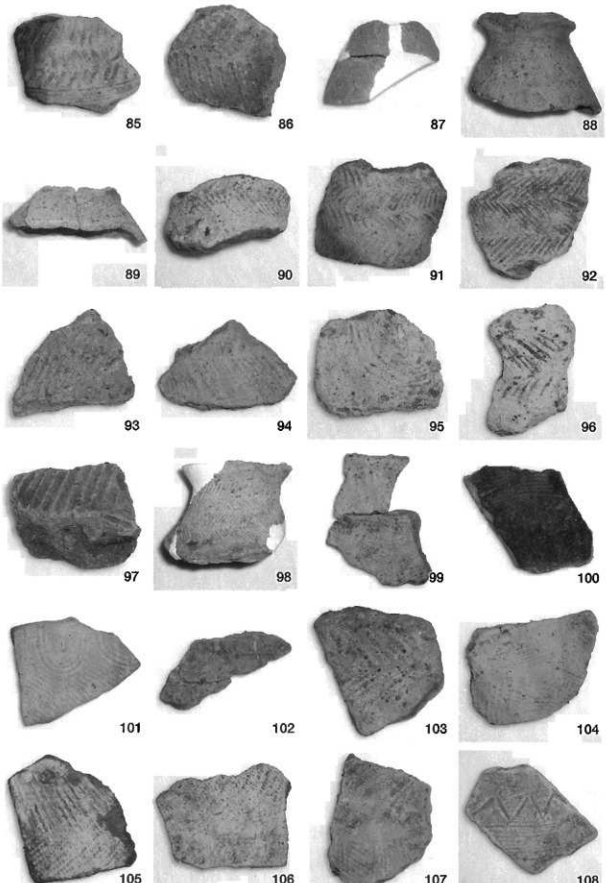
58

60

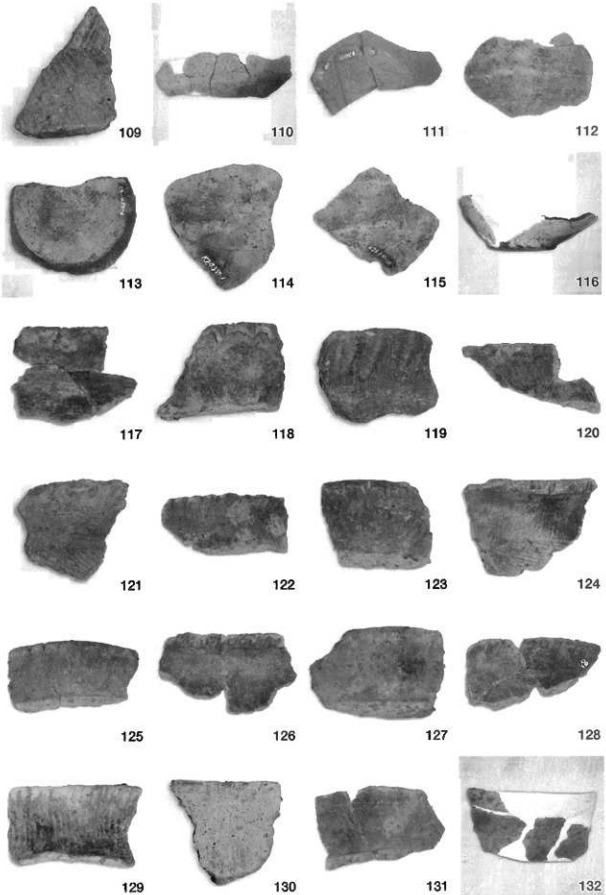
図版16



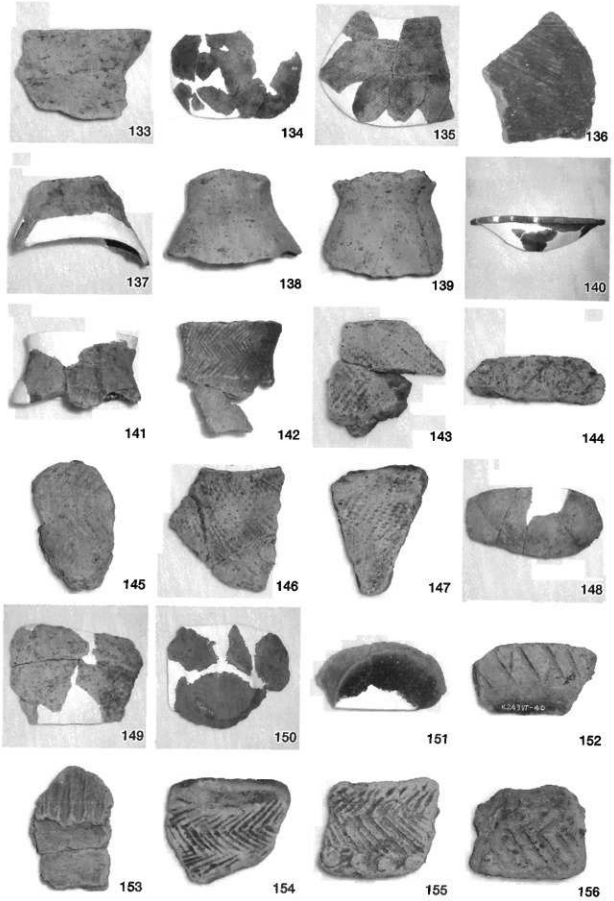
図版17


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108

図版18


109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132

図版19


133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156

図版20

157 158 159 160

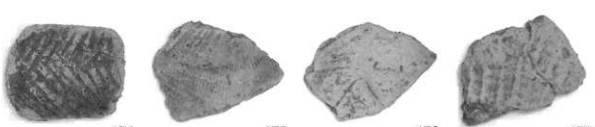
161

162 163

164 165

166 167 168 169

170 171 172 173


174 175 176 177

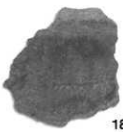
図版21

178

179

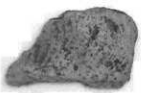
180

181


182

183

184


185

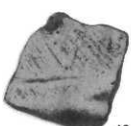
186

187

188

189

190

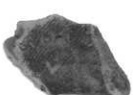

191

192

193

194

195


196

197

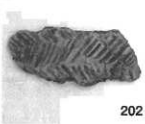
198

199

200

201

図版22

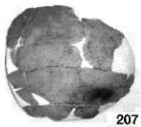

202

203

204

205

206


207

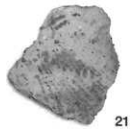
208

209

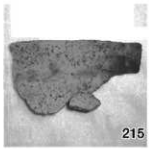
210

211

212


213

214


215

216

217

218

219

220

221

報告書抄録

ふりがな	たかだ いせき
書名	高田遺跡
副書名	茶園改植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編者者名	木村弘之
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1　TEL (0537) 21－1158
発行年月日	西暦 2005年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高田遺跡	静岡県掛川市吉岡1220,1221	22213	K-243	34度47分25秒	137度57分16秒	20030716～20031209	900㎡	茶園改植

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田遺跡	集落	弥生時代後期	竪穴住居跡 12軒 掘立柱建物跡 2棟	弥生土器 土師器	
	古墳	古墳時代前期	古墳 5基	土師器	

要約	眼下に河川を臨む標高47m前後の台地上に立地。弥生時代後期後半（菊川式）の住居跡12軒（形状：隅丸方形）、掘立柱建物跡2棟（いずれも1間×2間）を検出。また、これら住居跡と切り合い、古墳時代前期（廻間Ⅱ式）の方墳4基、円墳1基を検出（周溝のみ）。主体部は検出されなかった。周溝内から当該期の土器が出土。1～4号墳は辺・径9m前後、5号墳は1辺10m以上を測る大きさの古墳と推定される。国指定史跡「和田岡古墳群」の成立を考える上で重要である。

※緯度・経度は世界測地系を使用

高田遺跡

茶畑改植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年3月15日

編集発行　掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537) 21-1158

印刷　株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013